332-230

露西亞印象記

ブランデス著
中澤臨川譯

明治
45. 2. 26
內交

Georg Brandes

この譯書を中村秋三郎
青江喬松の兩君に献ず

ゲオルヒ、ブランデス

ゲオルヒ、ブランデス(Georg Morris Cohen Brandes)は一八四二年に丁抹の首都コーペンハーゲンで生れた。然かし生粋な丁抹人ではなくて、猶太人の出であることはその姓名を見ても解かる。彼の『回想録』に次のやうな事が書いてある。

私が乳母に連れてられ戸外へ遊びに行くと、他の少供がよく奇妙な名で私を呼ぶので、ある日不審を起して家に歸つてから母に訊いてみた。『猶太人て何のことですか』――『猶太人も矢張人間です』――『様らはしい人間でしやうか』――すると、母は笑ひながら『左様、時によると至て様らはしい人間だが、然うとばかり限りません』――『猶太人を見たいものだ』恁う訊き直すと、母は『お容易いことだ』と言ひ乍

ら、安樂椅子の上に懸つてゐる大きな鏡の前へ私を差上げた。すると、私が大きな聲で泣出したので、母は急いで私を下して了つた。後で母は輕卒なことをしたのを後悔して時々その話をしたほど私の驚は大きかつた。

是をみても解るやうに、ブランデスは幼い頃から人種上の僻見に苦しめられた。彼の『イプセン論』の中で彼は恁う云つてゐる。若い頃の色々な苦勞が一生イプセンに祟つた。勿論彼は理想や空想の力で悲慘な現實に打克つだけの能力は有つてゐたけれども、それでも若い頃の貧困の傷は癒えるものでない。普通斯樣な場合に人は卑屈にならなければ頑固になり、氣難かしくならなければ冷酷になる。イプセンに於てはそれが孤獨的、鬪爭的、嘲笑的な性質となつて現はれたと。ブランデスも是と同じやうに、彼が猶太人の出であると云ふことが、その當時の國情と合して、彼の生涯に矢張反抗的、鬪爭的の氣分を加味した所以であらう。彼の強い憎惡心は時として其判斷を誤らせ、彼の反敎會的行動は狂妄の分子をさへ

雜へた。

彼は幼ない頃から蒲柳の質であつた。『私は何時も青い、瘠せた、小さな兒だと云はれてゐた。三十年後にも或る人が私を評して「貴君の顏の特色は青白い色艶にある」と、云つた』と彼自身述べてゐる。免に角彼は性來强健な質ではなかつた。それでも彼は無難で學校生活を終つた。彼は十七歲の時には大學へ入つて、初めは法律を學んだ。其當時の丁抹の敎育界は保守主義の榮えた時代で、哲學は神學の婢僕として、美學は道德の手段として敎えられた。ブランデスが自國の知識生活に不滿を懷いて、後年劇烈な反抗運動を起したのも、その萠芽は彼の學生時代に始まつたものである。

『私は快活な色で人生を觀るやうには生れ付かなんだ』恁う彼は曰つてゐる。『私の性質は唯だ一意間斷なき努力に適くのみで、人生を樂むには餘りに張りつめてゐた』と。で、彼は青年時代から、眞の意味での刻苦勉勵をした。ゲーテからへ

ーゲル、ヘーゲルからスピノザと云ふ風に世界の知識を漁つた。スピノザの萬有神教に厭足らず、基督の罪の教にも慰安を得なかつた彼は、若い頃からキエルケガールドの懐疑哲學を悦んだ。彼は一生無神論者で暮した。

彼は大學にゐる頃初め法律を勉強したが、その趣味に合はないことが解つてから文學に轉じた。自分が法律を捨てたのは決して我儘勝手な理由でないことを兩親に知らせる爲めに、一八六二年に『古代の運命論』と題する論文を書いて金牌を得た。後、幾許もなく大學を卒業したが、その頃から彼は一部の人から認められるやうになつた。

彼が大學にゐる頃から、直接感化を享けた人と云へば、教授ハンス、ブルフネルである。實き所信を大膽に告白した不可知論者で、ブランデスは後年この人に其大著『十九世紀文學の主潮』を献じてゐる。それから彼はその頃から同窓のジュリアス、ランゲと知り合つて、二人は無二の親友になつた。ランゲは本書中にも

現でゐるやうに有名な『彫刻史』の著者である。

一八六六年にブランデスは海外漫遊を思立つて先づ巴里を訪つた。滞在一年間ほどの間に彼は色々の新知識を齎して歸つた。その時彼は平生崇拜するテーヌにも逢ふことが能きた。後年彼がテーヌに關する論文を書いてコーペンハーゲン大學から哲學博士の學位を得たのも、其旅行中の賜であつた。彼がこの佛蘭西の獨創的批評家、新興文藝の鼓吹者から受けた影響は尋常一樣ではない。『あらゆる佛國現代の著作家のうちで私の一番好きなのはテーヌである』、恁う彼は自白してゐる。『テーヌは私にとつては、獨逸哲學の抽象と衒學(ペダントリー)の消毒劑であつた。丁抹―獨逸流の教育で閉鎖されてゐた私の眞才能の途を開けてくれたのは彼である』と。

一八六八年には彼は伯林を尋ねた。それから一年置いて一八七〇年から翌年にかけて再びストックホルム、巴里、倫敦、羅馬と長い旅に上つた。その間に彼は自分の崇拜するテーヌ、ルナン、ミルなどと親しく交際することが能きた。

一其數年間に彼は色々な著作をした。『美學の研究』、『批評と描寫』などは其主なものだ。パガニズムに近いやうな彼の學說は、保守的な故國の敎界に物議を牽起さずには已まなかつた。彼は殆んど國民の敵と見做される迄に至つた。一八七一年、彼が長途の旅から齎した該博な知識と急進思想を以て、コーペンハーゲン大學の講座に立つた時は、全國民の視線を一齊にその身邊に集めた。今まで永い間眠つてゐた丁抹の思想界に革命の機運が萠した。暫くは劇しい動搖が續いた。（ダニッシュ大學ではその爲め凡そ半年間も一つの講座を空に明けて置いたほどである。それは美學の敎授カルステン、ハウフが自分の後繼者にブランデスを望んで置いて死んだ。所が、世論が喧しいので、大學の評議員も何れとも決し兼ねてゐたのだ。）

斯樣な間に一八七七年を以てブランデスは獨逸に去つた。それから七年間と云ふもの彼は伯林に滯在して獨逸文學を研究してゐた。彼は自國語と同じやうに獨

逸語を繰つて著作をした。で、時々獨逸人と間違へられることさへあつた。可笑なことにはエトマンド、ゴッスでさへ其『北方研究』のデディケーションで、同じ間違をしてゐる。ブランデスの重要な著作でキエルケガールドやイブセンの研究は其時代に出來た。

一八八三年に彼が再び故國へ歸つたときは、その邦の思想界は非常な變化を閲みしてゐた。寫實主義を標榜する新しい作家が輩出するやうになつた。彼は四千クラウンの年金を受けて、國家の尊敬する學者として故鄕へ歸つたのである。

彼はその後も引續いて、『十九世紀文學の主潮』（これは一八七一年に彼がコーペンハーゲン大學でした講演を集成したものである）、『近代歐洲文學の人物と事業』、『近代精神』、『沙翁論』、『回想錄』などを公にした。玆に譯出した『露西亞印象記』も其一つで、なほ姉妹篇とも謂ふべき『波蘭印象記』がある。

イブセンがブランデスに寄せた書簡の中に、『眞に必要なるものは人間の精神の

革命である』と言ふ句がある。この詞はイブセンを解すべき金言(モット)であると同時に、またブランデスをも解すべき金言である。同じスカンヂナビヤ半島で、邦を隣して、彼等は同じやうな時勢に遇ひ、同じやうな仕事をした。萎微沈滯した國民を敵に廻して、人間の精神の革命Menneskeaandes Revoltieringを企めた。二人の態度には戰士の面影があり、強い人格の權威を以て讀者に迫る所がある。ブランデスの『イブセン論』が唯一獨特のものであるわけは斯樣な道理からである。ウイリアム、アーチャーも言つてゐるやうに、この書は普通の文藝批評ではなくて、同じやうな境地にある二つの偉大な心が、三十年間相並んで發達して來た比較心靈史であるのだ。

文藝批評家の態度としてはブランデスはテーヌを學んだが、人間として彼の最も私淑してゐたのは、イブセンのほかにスチュアード、ミルがある。彼はその漫遊中にミルに逢つた時の感想を『回想錄』の中で談つてゐる。ミルは佛蘭西の

歴史及び思想界を最も敬慕する一人でありながら、彼自身は佛蘭西人の型とは全く違つてゐた。佛蘭西には理解力の深い人々のある中にも、テーヌのやうに大膽で重々しい者もあり、ルナンのやうに冷靜で敏捷な者もあつた。然かし彼等は思想界だけの人で、人生の現實面とは些しの交渉をも持つてゐなかつた。實踐の人ではなかつた。ミルは是と違つて、彼等にも優る思索家であり乍ら、彼の勇氣は單に理論の上にばかりとゞまらなかつた。テーヌやルナンの立脚地の獨立を消極的のものとすれば、ミルのは積極的攻勢的のものであつた。彼の意志は鐵のやうに堅く、假借なき性格と言說を以て戰鬪的態度で働いた。『で、私は一生に始めて自分の理想としてゐた英雄の權化をミルに於て見た』とブランデスは言つてゐる。猶彼の告白に據れば、彼の理想の人は兩面の性質を併せ有たなければならない。——天才と人格、偉大な能力と決斷心。然るに世の中の文學者や科學者の中には、天才の秀でた人は幾らもあるが、大きな人格を具有した者は至て尠くない。ミル

のやうな偉人は稀に見るばかりだ。ブランデスは其論文集の序でも、自分の常に奉じてゐる箴言だと言つて、『理解の問題では能ふ限り可撓性(フレッキシブル)に、主張の問題では能ふ限り不可撓性に』と云ふ文句を掲げてゐるが、彼は之を以て單に文藝批評上の格言としてゐたばかりでなく、實に人性の指針とも思つてゐたのである。

人生に對するブランデスの態度は以上述べたやうであるが、彼はなほ恁うも言つてゐる。『私の天性は觀念を取扱ふほかは、政治その他の實行界の活動には不適當であつたが、それでも私は平凡な學者の屑、娯樂的作家、または文學史家として立つばかりでは滿足ができなんだ』と。で、斯樣な態度から、彼は文藝批評家としても、或る特種な作家または作物を其周圍から引き離して、單に美學的立脚地から鑑賞すると云ふ側の人ではなくて、人文史の潮流を作る一分子としてそれを取扱つた。『最も深い意味に於ける文學史は靈の心理、靈の研究、靈の歴史でなくてはならない』とは彼の持論である。彼の大著『十九世紀文學の主潮』は斯樣な意

味から、その世紀の上半期に起つた精神上の新運動を闡明する爲めに書かれたものである。彼の批評の態度はダイナミックである。猶ほ彼はその主義主張の爲めには、少し位不都合な材料をも勝手に燒直すと云ふ流儀である。で、『理解の上では能ふ限り可撓性』と云ふ彼の箴言も、その反對の主張の方面を餘りに重く視過ぎる性癖から、時々忘れられるやうなことがあつた。

テーヌが嘗て或人にブランデスを紹介した言葉に『この若い丁抹人は餘り物を盲信しない性質だが、たゞ「美學」を奉ずるだけが缺點だ』と言つたさうだ。テーヌは大の審美學嫌ひで、彼の說によると、獨逸の美學者とは、全く藝術的觀念や文章の鑑賞力のない連中の集りで、唯だ定義ばかり作つて暮してゐる者と見られてゐる。之に據ても彼に師事したブランデスの批評の態度は窺ひ知ることができる。『文學をして切實に人生に涉らせやうとするのが私の努力である。……私の論步は宗敎、社界及び道德の諸問題に及ぶであらう。惟ふに文學と人生と……

の間には離るることのできない關係のある限り、私の講ずる文學史は決して客室の裝飾のやうなものではならない。』恁う彼は『十九世紀文學の主潮』の中で言つた。

ゲオルヒ、ブランデスの生活事業の大略は以上に述べた通りである。玆に譯出した『露西亞印象記』(Indtryk fra Rusland)は、彼の著作のうちでは比較的輕い方のもので、一八八七年に彼がその邦を歴訪して歸つた時の作である。原作はこの印象記と『露西亞文學印象記』の二部から成つてゐるが、先づその前半だけを譯することにした。

奇警な觀察と該博な知識を縱横に振り翳して、讀者をして應接に遑なからしむるやうな趣のあるのがブランデスの文章の常である。殊にこの書に於ては其特色が輕妙に素朴に現はれてゐる。『新現實主義と新神秘主義の母體』と彼の驚嘆した其國土とその人民とは、ブランデスにとつて如何に好箇の題目であつたらう。

四十四年十二月

譯者誌す

緒言

一八八七年に、私は聖彼得堡の露西亞著作家協會から、佛蘭西語で一場の講演をせよと云ふ依囑をうけたのが因で露西亞へ漫遊することになつた、先方の申出は、萬端の準備を整へて置く代りに私の收入の四分の一を協會の貧民基金に寄附してくれろと云ふのであつた。

私が聖彼得堡にゐるうちに、同樣な招待が莫斯科大學の監督、伯爵カブニストから來た。その時も矢張收入のうちの同じ割合だけを貧困な學生に惠んでくれろと云ふのであつた。私は聖彼得堡へ行く途ではヘルシングスフォルスを訪つた。また莫斯科で講演を濟したあとで、丁度その都から南へ汽車で二十時間の旅に當

る中央露西亞の或る別莊で暫時日を送つた。其處から私はスモレンスクへ行き、スモレンスクからワルソオへ行つた。

斯樣なわけで、三箇月の間に、私はこの邦の飛び離れた散らな個所々々をも知り、この大帝國の目ぬきな場所をも知るやうになつた。私は都會の生活も田舍の生活も觀察する機會があつた。夏、冬の露西亞をも視た。私の旅行した特別な事情は異種族の人や社界上異つた階級の人の幾百人もと出遇はしてくれた。私は大露西亞小露西亞の土着民、芬蘭人、瑞典人、アルメニア人、波蘭人を男女とも見た。上流社會の人も普通の平民も、保守主義者も自由主義者も、法律家も、醫者も、著作家も美術家も、大公連も教授も、新聞記者も、百性も官吏も下賤民も見盡した。

私は茲で印象記を書いては見たものの、全體としての露西亞帝國の私の記述が、何れだけ貧弱なものだかと云ふことは片時も忘れない、私の視たものの幾小部分

を私が充分に理解できたか、また露西亞のやうな邦とその住民のいかに片碎な部分だけしか私の眼に映じなんだかと云ふことも氣付かないではない。然かし、私は自分の觀察の能力と、自分の判斷の健全とに當然信頼することが能きる。

ジー、ブランデス

目次

一　露西亞帝國——廣袤——自然——露西亞の特色……（二）
二　田舍と都會——聖彼得堡と莫斯科——自然の單調——四期の變遷……（七）
三　國民の性質——露西亞人に獨創力ありや——日用品、社會制、自治制、及び知識界に於ける露西亞人の獨創力——一般の性癖——黑き土……（二五）
四　露西亞人の生活——普通教育の缺乏——農夫と勞働者——迷信と無智——服從

性――露西亞のインテリヂェンチャ――男女の『虛無黨員』――敎育ある青年と平民との對照……（四九）

五

文學者及び美術家の祝賀會――官僚社界――大臣――檢察官――總督――極保守主義の青年……（一〇二）

六

生粹（エリット）――露西亞と波蘭に於ける敎育ある貴族――露西亞人の根本趣味は近代的なり――官僚社界の感染――無節操と變心――家庭劇――露西亞貴族の代表的人物――露西亞の知識界に於ける二潮流。西歐派と純露派――露西亞のヂレンマ……（一一九）

七

戰爭に對する國民の感想――敗戰の希望――時勢の先驅者――宮中生活――ルツェンとカトコフの勢力――農奴解放――波蘭に於ける暴動の鎭壓の影響――根本的、政治的、及び宗敎的反動――暴力黨と暗殺――內治政策……（一六〇）

八

露西亞の新聞――新聞と雜誌――現代の文章家――科學上及び文學上の天才――露西亞の讀者とその受納性……（一九六）

九

露西亞の藝術――建築と美術に於ける露西亞人の獨創と模倣性――建築術及び宗敎畵の歷史――カゼリン治世より現代に到る繪畵の發達。ブリロフ、イワノフ、クラムスコイ、及びリエピン――彫刻術。アントポルスキイ――工藝品……（二三六）

露西亞印象記

一

アレキサンダア、フオン、フンボルトは露西亞帝國の範土の宏大なことを示すために月に譬へてゐる。滿月の時その半球に一つの領土が見える。その領土は露西亞帝國のそれよりも狹い。一寸五萬平方哩ばかり狹いのだと云ふ。

一つゞきの範土で恁うまで宏い所は他にはない。地球上の土地の六分の一を占めて、人口が稀薄だと言つても、九千七百萬の人間が住んでゐる。其うち六千七百萬は露西亞民族である。

陰鬱で活氣のない點から見ると露西亞帝國の位置とその宏大な範土とが能く似てゐる。茫漠とした平原が獨逸の境から中央亞細亞まで、一方は黑海から極北までのべたらに續いてゐる。そして遠い隅の方には高加索連山が海よりも低い所から起つてアルプス山よりも遙に高く聳えてゐる。北端には歐洲で一番大きなラドガ、オネガの二つの湖水が在る。南方にはカスピアン海が在つて、之は世界中第一の湖水だ。河も亦その平原のやうに、山のやうに、湖水のやうに矢張宏漠としてゐる。第一がヴオルガ河で長さから幅から歐洲きつての物だ。思つた程水嵩は無い、早いたとへがダニユウブ河には及ばない。然し之は土地の平な事と雨量の尠い爲だ。丁度南方露西亞の數多い河の水が皆な土に呑まれ、蒸發して仕舞ふ樣に、カスピアン海に注ぐヴオルガ河の無量の水量も數百年經てばとて湖水の水準面を上げえない。

海に譬へて言はれる茫漠の高原は海ほど風致の變化がない。不變の單調がその特色である。響のやうに廣く、ラインも短しとする大河には小さい河の性急で騷がしい所がない。偉大な遲鈍で流れてゐる。この遲鈍とこの單調とが恁て露西亞的の所だ。

何もかも宏大で持切つた此帝國の風土には、一つとして溫和で中庸な所がない。範土の全體が丁度手足のない身體のやうなものだ。南北西の歐羅巴のやうに判然した凹みもなければ、半島もなく、島もない。氣候は大陸的で、長い嚴しい冬と炎き付けるやうな夏があるばかり。寒暖を調和する海には遠く、暖流の影響も受けない。

山なく、谷なく、森と沼と高地の大きな平原である。北海の寒風が障る物なく全範土を吹き通すのも、大西洋、バルチック海または地中海が他の歐洲各國に與へるやうな溫潤な氣のないのもこの爲めである。クリミアと高加索だけは除いて、この宏い領土の中に南國の氣候がない。誰かが言つたやうに、露西亞には夏はあるが南がないのだ。

單一な氣候ではあるが、場所に依て極端がある。露西亞の北海岸の夏期の平均溫度(華氏三十七度)は南の方のセバストポオルの冬の溫度よりも低い。それから

オデッサの正月とクリスチアナの正月が同溫、莫斯科とコオペンハアゲンとエヂンバラとは同緯度に在り乍ら、冬期の平均溫度が露西亞の都では華氏拾度、丁抹の都では三十三度、蘇格蘭の都では三十八度と云ふ割合だ。

歐洲露西亞と西伯利亞とは風土の模樣に違がない。嚴烈の度合が多少違ふ。馴鹿ばかり住む北の邦から、葡萄が熟し印度米の產する南の邦まで、歐羅巴露西亞にはなだらかな風土の變異はあるが、植物にせよ動物にせよ西方の歐洲人に異樣の感を與へる物は一つもない。我等の眼に見馴れた動植物がそこら一面に擴がつてゐる。野獸は森林の熊と、それから森にも野にも高原にも澤山の狼がゐる。歐羅巴露西亞にゐる狼の數がざつと拾七萬五千匹。そこで牛拾八萬頭、羊五十六萬頭、犬拾萬頭、人間百五十人が年々此等の狼に襲はれるのだと云ふ。金に直して一匹の狼の消費高が約八十留。

先づこの狼を除いては危險な動物も稀有な者もゐない。露西亞の無機體界の宏

壯な有樣にひきかへ、動植物界はみじめなものだ。森の中の樹にも延びがなく、動物も至つて平凡だ。

露西亞を辨ける本源の特色は宏漠であり、乍ら單調なことだ。際涯ない平原、長く廣い河、單一な氣候のそればかりではない、地質の構成まで一本條に出來てゐて、この宏い邦が一つの有機體を造つてゐる。森は高地と、耕地は高原と、高原は森と互に離すことが出來ない。高原は樹を要し、森は家畜を要する。同じやうに海岸は內地に俟ち、內地は海岸に俟つことが多い。モルトケ將軍の露西亞からの手紙に、『どの場所も他の場所の御陰で立てゐる、北方の森は南方の耕地に負ひ、中央の工業地は兩端の土地に負ふてゐる、』と言つてある。それ故に、斯の大帝國が幾多の小國に分れると云ふやうな夢想は成立たう筈がない。自然が地理的に結合した物を分け、自然が分けた物を結び付けることは人の仕業には及ばぬ。スカンヂナビア半島の三國民の合一を破た地勢の理は、地球の六分の一を結合させた。

二

露西亞は農業國である。割合に都會が尠ない。田舍の町は何れも能く似たもので、一つ二つ見れば、全體がわかる。左樣な田舍町には先づ公園がある、お寺がある、知事の邸宅がある。それから病院がある。他も似たか寄つたかで、住民の貧富に依つて少しの相違のあるばかりだ。たゞ茲に一つ見落せないのは、どの町にも何の町にも監獄のあることだ。二萬五千の人口を有つロムヤのやうな町に六百人の囚徒が這入つてゐる。

晴れた夏の日に、かやうな田舍町の生活は餘程人の眼を牽く。愉快さうな服裝、男の赤い襯衣、女の縫箔した短衣がぎら〳〵と日に輝いてゐる。自分の見たスモオレンスクと云ふ町はドニイバアの兩岸を圍んで陽氣に樹ち並び、切つたやうな

左岸の上に大部分の屋並があつて、數多い塔や寺の屋根が、右側から見ると丁度四方の景色の上に強い浮彫のやうに見えた。而しどちらかと言へば此等の田舍町は一體に平地の上に並んでゐるので、餘り趣がない。商業上から工業上から、また奈翁によつて名を高めた都會などのやうに歴史上から觀ても矢張趣味のあるのは大都會である。田舍町の知識生活は悲慘な圖だ。カルタと火酒、火酒とカルタ。

芬蘭土と波蘭土とバルチック海岸の諸州とを除いては、露西亞の知識生活は聖彼得堡と莫斯科の二大都會に限られてゐる。

國境を越えて露西亞の鐵道に遷つたとき、他界からの使のやうに旅客を驚す三つの物がある。第一は豐富でそして柔な調の好い國語で、他の西方歐羅巴の舌とは尠しも似てゐない。それから字母、之には二六文字の外に全く新しいのがあり、普通のものとは意味の違ふのがある、(例へばNの代りにHを用ゐる)。次は暦

で、我等の使ふ太陽暦よりは拾二日宛後れてゐる。西方及び南方歐羅巴の文明に通ずる橋はこれで以て斷たれてゐる。實際に露西亞が歐洲の他の邦から後れてゐるのはたつた拾二日だらうか。

旅客が第一に訪ふ所は大概聖彼得堡だ。彼得大帝の言つたやうに、聖彼得堡は近世露西亞が西方に向つて明けた窓である。所が歳の大半はこの窓から見た景色が霜の花に遮られるので困る。その時分から露西亞の最も必要を感じたのは開港である。北方のアルカンゼルは殆んど氷に閉ざされてゐる。クロンスタッドを開いてみたが、之も半年は閉ざされる。それから後にも浦港のやうな港を得たが、何れ一つ氷に縁のないのと云つたらない。僅かに黑海とアゾフ海とにある港からの航海は一年中出來るが、それすら全くの自由とまでは行かない。コンスタンチノオプルが土耳其の領分である間、出入の船はきつとダルダネルスの海峽で檢められるからだ。

Canal

聖彼得堡を造つてから、大帝はその國を西方に近接させやうとした。この首府は取も直さず大帝の決心の符號であり、實行の手段であつた。同時にネバとヴオルガを通ずる開渠も造られたが、大帝の胸の中は、流に溯つて東方南方の地の富を搬び、西方に其出口を造ると云ふにあつた。

聖彼得堡の町の中を數多い溝と流が交叉してゐる。沼地の中に造られ、荒地で圍まれてゐる。全く人工の都會だ。田舍の得意を控えてゐる譯でもなく、町は官吏と兵士で保たれて行くのである。尤も近年は商工業が大分盛んにはなつて來た。莫斯科の舊都と同じことに非常に不健康な町だ。人の產れる數より死ぬ數が多く、年々一千人乃至二千人宛減るので、外から移住する者が無ければ人口が斷えて仕舞ふだらう。教育は半開で、現今九拾萬の市民のうち讀書の出來ない者が參拾萬人ある。それから今一つ言へば宏壯で奇麗な町だ。半ば歐羅巴的半ば野蠻的の美を有つてゐる。

一七一二年から同一六年まで此都の造り上げられた五年間に、彼得大帝は凡そ拾五萬の勞働者をネバ河畔の沼地に連れ込んだ。それで其大半は熱病や傳染病や饑餓やらで死んだのである。石工を他で使はせないために、全國に命令を出して石造の建築を禁じた。命令に背いた者は財產の沒收か乃至は西比利亞に追放の罪に逢ふ。それからまた三十軒以上の農家を有つ豪族は必ず新都會に一軒の家を建てなければならないことにした。それで其建物の場所と大さとがそれ〴〵にちやんと決められたものだ。和蘭仕込の大帝の事であるから、愈々新都會が出來上つて命名の段になると、御自身の名を和蘭風に Piterburg とやつて、それを其儘都會の名にした。

段々と發達するにつれて、聖彼得堡は非常に贅澤な町になつた。歐羅巴のどの都會よりも主人と從僕との數の比例が多い。一八七〇年に伯林で三人以上の婢僕を使つてゐた家は全戸の百分の二であるのに、聖彼得堡では一割二分に上つ

てゐる。また同年の統計で十一人以上の婢僕を使つてゐる家族は伯林のは擧げてないが、聖彼得堡のは百分の一に上つてゐる。

停車場から愈聖彼得堡に乘り組むと、ネバ河はまだか〳〵と待たれる。實際我々の心には聖彼得堡とネバ河はそれだけ密接に結ばれてゐた。所がそれは只開渠なので僅かにネバ河に注ぐフオンタンカ川があるばかりだ。愈よネバ河が眼の前に出た。海の腕のやうに廣く、氷が閉し雪が積んで、高い堤と島々の間に見える。その島の一つにペテロ、パプロオスクの城砦が金色の尖塔を日の光に輝かせて建つてゐる。それから赤黄色の宮殿が幾つか見える。露西亞の官省の建物はみな左樣だが、是を觀ると色合の奇體なのに驚かされる。半分は監獄色で半分は生々した色をしてゐる。

冬宮の前で驚かされるのは、そこに建てゐる醜い奇體な鐵の小舍だ。立派な街をだいなしにして了つてゐる。然しこれが又この邦の氣候に親て好い感念を與へ

るので、冬宮と同じに必要な物だ。いや、冬宮より必要なのかも知れない。その小舍の眞中に大きな爐があつて、冬の夜は石炭が一ぱいに燃えてゐる。馬車の別當や從僕やらが宮中にゐる主人を待つま、凍え死なぬやうにと云ふので。

ネバ河の左岸にはまた海軍省と大理石造の聖アイザック寺院がある。之を見ても露西亞人の嗜好には設計の美よりは材料の宏壯と豐富とに依て立派な物を仕上げやうとする傾のあることが分る。寺院の中は床も壁もいろ〳〵な大理石で敷きつめてある。十六尺から十七尺の白青の柱がある、頭と根に金の飾をした三十尺からの孔雀石の柱がある。然し記憶に殘るやうな形式の美は一つもない。最先に眼に付く美術品はファルコネットの作つた大膽な彼得大帝の紀念碑だ。大帝が馬を驅る光景で、後足で立つた馬が芬蘭土產の大理石塊の上に立つてゐる。おそらく近代の騎馬像中の傑作だらう。まだこの外にもネバ河畔には以太利式や佛蘭西式の奇麗な建物がいくらもある。それからまた非常に數多い神龕や禮拜堂が在つ

て、その前に來ると通行人が誰も彼も幾度も十字を切る。偶まには立留まらないで禱を上げ乍ら行く者もある。ネバ河にも堤の上にも橇が續いてゐる。公私の別なく此等の橇にはたゞ一つの腰掛があるばかりで、一般に男女二人で乘るやうになつてゐる。そして男は常に女の腰の所に腕を廻してゐる。恐らく投げだされない用意だらう。

橇には誰でも乘る、一寸町に使に行く從僕まで乘る。場所と場所との距離が遠いので已むを得ない。二萬五千人からの馬車屋がゐて、客は一々値切つて乘るのだ。不馴な外人には能くあることだが、『いくらで行く』、『えゝ十五コペク戴きます』、『馬鹿言へゝ廿五コペクしか出せない』。

初春の頃、空が晴れて日の光の奇麗な日であつた。私はこゝからネブスキイ、プロスペクト町まで乘つた。別當は露西亞の百姓であつた。夏の間は自分の國で田を耕し、冬になると所謂 Izvoshchik（ギヲシヤ）となつて口を糊するのださうだ。先生山

の低い帽子の下から髭武者な顏を出して座つてゐる。着てゐる上衣は長くて寬くりしてゐて、腰から下は襞を取つた襯衣か何かのやうな形で足まで逹してゐる。さうして縫取した肩掛を腰に卷き付けてゐる。實に奇妙だ。某町の博物館にクリミアのケルッの土の中から堀り出した古物だと云ふ腕飾があるが、それについてゐる髭の生へた人物が服裝なら人相ならこれら此等の百姓の別當にそつくりだ。恁うした型は昔から在つたものと見える。

日の輝く下のこのネブスキイ、プロスペクト町には三列又は四列に馬車が斷間なく續いてゐる。是が生粹の大都會の光景だ。優美な紳士淑女が馬車の上にゐる。兩側の歩行道にはより貧乏な市民が歩いてゐて、女は木乃伊のやうに身體をつゝんでゐる。春にはなつたが、まだ寒さを懼れてでもあらう。一寸見はもつと似合ふやうに身作りすることが出來なささうだ。大抵な者は極く尋常で目にも付かないが、偶まには撰り好みした服裝で人の眼を牽く者もある。自分は甲蟲のやうに

輝いた薄緑の天絨毯の衣物を着た一人を思ひ出す。また背中の下まで縫取した陽氣な黄色の天絨毯を着てゐた一人を思ひ出す。ある馬車の別當は赤と金とで飾つてゐて眞物の野蠻人みたやうだ。自分の馬車の別當も何の馬車の別當も、數多い禮拜堂と、御神燈の火を町に投げ付けてゐる神龕の前に來るたび額と口とそれから胸の前で十字を切る。是はみんな習慣から來るので、敢て十字を切つたり禮拜したりする割合に信心の深いわけではない。右の手で十字の符號を切り乍ら、左の手では背中を搔いてる不屈者もある。

ある男は極端に異常な顏付をしてゐる。また大抵の女は萎黄病にかゝつてゐる。氣候の關係から室内にばかり座つてゐるからだ。水は惡いのでとても飲めない、食物も餘り好くない。氣候の上から言つても英國人などよりは滋養物を用ゐなければならない筈であるのに、この邦の貧民は大麥の麵麭と「キャベイジ、スープ」と粥ばかり食べてゐる。特有の飲料は茶と「クヴス」と「ヴドカ」で、獨逸の輕

い麥酒英國の強い麥酒ほど滋養分を含んでゐない。

主要な町の生活は全く近世的だ。然し靴革の靴を履いて補布の長衫や羊の皮を着た髭武者な百姓（Muzhik）を見ると昔の露西亞が思ひ出される。僧侶は足までとゞくやうな褐色の法衣を着、長い髭の上に黑い帽子を冠つて、縫取をした帶をしめ、髭が其帶まで達してゐる。僧侶町なかに立つて、昔の露西亞風の毛皮の帽を冠つた商人を値切つてゐる。すると寶石を頸にかけた商人の妻が側に立ち乍ら聞いてゐると云ふ圖が見られる。

然し實際古い露西亞を見やうとすれば、是非共莫斯科に行かなければならない。それは容易なことだ。聖彼得堡と莫斯科は二つの異つた世界であるとは言へ、近世の運輸機關で結び付けられてゐて、一方を午後に出ると翌朝は他方に着く。露西亞で眞實の急行列車のきくのはこの兩都會の間だけだ。

莫斯科は露西亞の内地の高原に横つてゐて、所々に緑色の屋根の塔の立つた城

壁で取圍まれてゐる。區ごとにその趣が變り、大都會のやうな所もあり、城下のやうな所もあり、全くの田舍町のやうな所もある。大厦高樓と幾條の道路を控へた巴里風の街と、背の低い家並が斷間なく續いてだゞ廣い庭のある街とが其處此處に散在してゐる。場所によると、八十萬の人口を有ち四百の寺院を有つたこの大都會の中の田舍とも見ゆるやうな所がある。空處は充分にあるが、市民の自由に這入れる所は殆んどない、――遊歩場と云つては郊外に限られてゐるので。而し何もかも宏大に出來てゐて、聖彼得堡が激しい快樂のために造られてゐるとは反對で、此處には休安の印が捺されてゐるやうだ。

此處へ來ると丁度亞細亞に通ずる驛路へ差懸つたやうな氣がする、隨分と珍妙な者が見られる。近世風の馬車に乘つた韃靼人の婚禮の群がゐる、華奢な歐羅巴式の幌馬車の中から頭巾を冠つた黒ん坊が顔を出す。自分が莫斯科へ行つた時、最先に出逢つたのが是だ。一寸考へても、それが大都會の町なかで見られるとは

隨分と滑稽だと思はれるやうな物に何程も出逢ふ。恐ろしく山の高い羊皮の帽を冠つた波斯人がゐる、例の緣なしの赤帽と云ふ裝束で土耳古人がゐる、それから異教徒のカルムック人がゐる。

莫斯科へ行つた者は先づクレムリンの御寺を訪ふ。此處へ這入ると取も直さず露西亞の臍の上に立つのだ。此處はこの國の愛國者にとつては神聖な場所である。大帝國の中心、歴代の帝王の即位式の行はれるところ。イバン、ベリキイの高塔に上ると宏い都會が一目に見下され、金色と綠色の圓頂額や家根がまばらに散つてゐる。一八一二年に諸將を率ゐて奈翁大帝が遙かかなたの町の一端に火の揚り始めたを見たのも此處である。マダム、ド、スタエルが『韃靼人の羅馬』だと名高い言葉を吐いたのも此處である。この言葉は野蠻民族の源頭で與へられた印象を一句に盡してゐる。而し佛蘭西の俗言に『露西亞人を搔けば韃靼人が出る』と云ふことがあるが、十中九までは當らない場合があるにしても、殘り一つに甘味があ

る。二百六十年の間（一二二〇——一四八〇）蒙古人の支配の下に引きとめられて、大分惡い影響を受けてはゐるが、尠し濁された位で能く露西亞人の特性を保つて來た。その民族の血肉を韃靼の貴族の氏の下に隱して、蒙古から入り込んだいろ〳〵な俗習にも敗けず、スラヴ族の氣質は汚されなかつた。それが彼得大帝の代になつて亞細亞を脱して歐洲の一國となつたのだ。キエフの都こそ歴史は古し、ゼルサレムのやうに聖都と崇められてはゐるが、大露西亞の人民には矢張莫斯科が母都（Moskva matushka）である。

生々した家根の色、金色の寺の塔、これが暖國のものなら甚だ惡趣味と評すべきだが、此處では氣候と歴史の上から根柢を有つてゐる。主に冬の嚴しいのと長いのとから來てゐる。ざつと貳百日間も冬が續いて、厚い雪が森も野も道も街も家々の家根をも單調に被せてゐる土地では、太陽の照つた日に空を賑はすきらゝした物を欲しがるのは當然の理だ。

冬は露西亞での特色の期節だ。この國の人民のあらゆる生活と氣質に印を捺してゐるのは冬である。

この國の人は冬になると戸も窓も堅く閉めて籠り込む。松のほたを燃いて、大きな「ストオブ」の側に不潔な空氣を吸つてゐる。それで夜は一家皆「ストオブ」の上に寢る。羊皮も衣物も着たまゝで寢る。日曜日に露西亞流の洗濯に這入る時の外は全一週間と云ふものは帶を解くことがない。

上流になると冬の期節には夜と晝と轉倒する。聖彼得堡ではそれがワルソウよりも烈しい。橇乘りの遊びも大概は夜遣る。深々とした靜かな中を、輕い橇に三疋の馬の轡を並べて走らせる。恁うした風な靜寂と狂奔との取交ぜが何とはなしに露西亞人の心を喜ばせるものとみえる。

以太利亞のやうな南國の植物はやゝ單調な所がある。桂も橄欖も年中青い。露西亞では冬と夏とは全で邦が異ふやうだ。西伯利亞での冬越しの生活の標本とし

て、小露西亞の詩人コロレンコオの書いた紀行を紹介する。この人はヤクツクの軍隊に數年間暮してゐたことがある。彼の住んでゐた家は鹿の皮で家根が葺いてある。冬が近くなると、氷の塊を窓の代りに置き、春になつてそれが解けるとまた玻璃窓に代へる。冬のうち氷の解けるやうなことは一日もない。段々と氷り堅まつて零點下五六十度まで下る。息をするには栗鼠の尾で製した呼吸器と云つた物を口に當てなければならない。氷の窓を通して太陽の昇る時は、奇麗な虹色がさす。

然し春が近づくと新しい生活が芽ざし、久しく斷えてゐた流動體が復つてくる。眞の春は雪解で餘り好ましくないが、ほんの束の間で、露西亞では一つの期節とは言はれぬ程だ。恁うして急に冬から夏に躍り込むときの人々の心持と云つたら、西方歐羅巴の者にはとても想像も出來ない。

莫斯科あたりでは是非に毛皮を着る必要がある。自分が其處を去つたのは五月

半ばで、其時は泥の海であつたが、それまでと云ふものは雪が降り氷が張りつめてゐた。丁度その頃或る人に誘はれて、クルスクの停車場まで乘つたことがある。一晝夜汽車に動られて自分達は南を指して來た。翌朝の五時に醒めると此處は已に夏だ。田舍屋が新綠の葉に圍まれてゐる。白楊や樺から人を醉はせるやうな強い香を吐いて、暖室に這入つたよりは猶生々した心持になる。草はないが、芝が一面に生へてゐて、その上に香の好い谷百合が斷間なく咲いてゐる。ヂエスナ、ボルバの二流に沿つた奇麗な昔風な密林が見える。豊かな調子で「ナイチンゲイル」の鳴いてゐるのを聽くと何とも云へない心持になつて來て、こんな好い聲は嘗て聽たことがないと思つた。無理もない、此處は「ナイチンゲイル」では世界一の名所だそうで、クルツからオリエルの地方にかけて、この鳥の數なら聲なら他に及ぶ邦はないと云ふ。

結つて言はうなら、露西亞には異常な物ばかりで中庸な物がない。それから非

常に單調だ。自然が單調だから期節の變化が著しい。大都會も田舍の町も皆大仕掛に出來てゐる。米國と同じで節用の餘地はいくらも有る。

三

風土の觀察が一通り了むと、此度は其土地に住む人民の情態から、其種族の性質の根元を見極めたいと云ふのが、旅人の情である。

この國民に關してもいろ〳〵と異つた方面から研究された。そのうちでも、露西亞人は何一つ造つたことがない、昔から少しでも文明に貢功したことがない、只他國の文化を吸收したにといまると云ふ說は早くから行はれてゐた。露西亞人は模倣の國民で創造力を有たないと云ふのだ。

いかさま、他の歐洲の大國民に較べると、この國の人民ほど異文明の御蔭を蒙つてゐる者はない。そして獨特の文明として人の注意を惹く物が尠ない。早い話が一寸外觀にもわかるが、前方から來る英國人は百步さきから見別けがつく、然

るに露西亞人となると側に寄てよく〳〵凝視なければ判然しないやうな次第だ。自分が『十九世紀文學の潮流』の中で、羅馬の裁判所の一坪は全露西亞帝國よりも歴史に富むと言つたのはあながち過言でない。

而し露國人の性質を評して一概に外國仕込と言ふのは皮層の觀察に過ぎない。露西亞を見舞つた旅びとが、「この邦にも何か獨創のものありや」と言ふ問題を掲げて、極めて微細なつまらない物から觀察を始めて、段々と根本の性質に溯つたならば、必ず其答を得るに失敗しないであらう。

第一に旅人の驚くのは馬を馬車に鎧ふ方法だ。恁う立派に三匹の馬を一つの車に付けた所は他にはない。常識から來た美の觀念のみではこんな仕業は難かしからう。第二にこの邦で出來る手細工物の創意には驚かされる。昔の文書から今日の金銀の七寶燒までずつと續いて露西亞の裝飾には缺くことの出來ない綠色を使つて調子好くあやつつた縫取の手巾など其一例である。第三にはこの邦の建築で、

東羅馬、蒙古、印度、波斯、それからゴシック、ルネッサンスといろ〳〵の式の混合ではあるが、兎に角露西亞希臘教の寺院の飾として國民的特色を有つてゐる。

この邦の人民はまた內治制度の上に獨創がある。所謂『ミル』Mir なるもので、家族制、土地共有制の自治區である。

露西亞は原始時代は勿論、今でも根本は族宗制度の邦と謂はれやう。一人の父に最上權があつて、子供は皆同等の權力で立てゐる。世運が強いた發達の結果、今日は有司制度の邦となつて、官吏の力が公共生活の自然な發展を破壞して了つた。が、それにも關らず、家族、自治區、國家のこの三つが露西亞帝國を作る機關となつてゐる。それ等は唯だ同じ性質のもので、廣さが違ふばかりである。露西亞の大きな家族になると親と子と云ふ單純なものでなくて、幾つもの時代、幾つもの家族を含んでゐる。つい近頃までは、一つの家族に、既に結婚した幾人かの子供がゐる、父母の兄弟がゐると云ふ風で、同じ家の中に住み、同じ田畠を

耕し、一番年長の人の命令を聞いて、共有の財産を守つてゐたものだ。その制度が近來になつて破れたと云ふものは、家長の權力が餘り増大して不自然になり壓制的になつたからである。（頂度國家も同じやうだ。）

それで自治區はたゞ家族の大きなもの、國家はたゞ自治區の集合即ち一大家族で、帝王は家長である。露西亞の家族制の二つの特色と云ふべきは家長の無限の權力と子孫の財産の共有である。專制政治の露西亞帝國はその第一の發達したもの、露西亞の自治區は其第二に發達したものと言へやう。實際この二大特質——帝王の權力と土地共有制——是れが露西亞の他から根本に違ふ所だ。他にも丁抹のやうに共有財産の制度の所もあつたが、奴隷開放とともに廢止になつた。たゞ殘つてゐるのは露西亞ばかりである。普通の家族制度がこの邦でも奴隷開放後は次第に離散したとは反對で、自治區の共有制度は昔の面影を保つたばかりでなく、個人の財産を犠牲にしてまで膨大した傾がある。一八六一年このかた莫斯科

地方で七萬四千四百八十の共有地のうち私有となつた物は僅かに廿九である。それから全露西亞の百姓持の畑地のうち九割から九割八分までは共有物である。

現代の喧ましい社界の中で、露西亞人が其自治區 mir を健全な社界組織の種子とも思ひ、この點で他の歐洲人の先驅者だと自信してゐるのは尤な次第である。

露西亞人の知識上獨創の點は、左樣に容易くは見分け難いが、而し決して尠いわけではない。精神上から云つて最も他人に深い感じを與へるのは彼等の現實主義である。彼等は現實と云ふものに一段深い趣味を有つてゐて、それがこの國民を大きくし、人生の戰に於て多くの勝利を得させたのである。同じ邦の中でも大露西亞の國民が他の地方の者に較べて優つてゐるのも全くこの天賦のためだ。小露西亞人は根氣强く、快活で、優美で、感情なら性癖なら大露西亞人に超越してゐるが、健全な常識が足りない。現實主義の趣好が大露西亞人の强い點である。佛蘭西文學に寫實主義が旺盛を極めた時露國にも輸入された。然るにこの土地で

は其れが餘り珍らしがられないで、寧ろ古いもの、知り悉された物として受取られたのも理由のあることだ。ずつと前から露西亞の小說家はこの問題を解いてゐた。未だ佛蘭西でロオマンチック派の榮えてゐる頃、露西亞の小說家は既に實社界の描寫を好め、他の藝術も詩の跡を追つてゐた。

この現實主義の趣好からして、大露西亞人は小露西亞人を見て感情づくの女々しい者と思つてゐる。また波蘭人をば、意志が弱く賴み少ない者、或はロオマンチックで空想好きな者と見下げてゐる。かやうに現實主義の强盛に發達した結果、この國の人民には純粹思索の傾向が缺けてゐる。されば、科學にした所が、彼等の趣味を持て研究するのはたゞ醫學と社界的の科學に過ぎない。

露西亞政府の今日の組織では個人の創見を充分に發揮させることが出來ない。政治に於て獨創の見識が允されないやうに、文學に於ても矢張同樣だが、然し、個人的の特性痼疾を顯すには一向差つかへがない。そして、その痼疾なるものが

甚だ屢ば神秘主義に行く。スラブ族一流の、かの現實主義と最もよく融和した神秘主義で、ゴゴルは其の過古の代表者、トルストイは現代の代表者である。また露西亞に行はれてゐる數多くの宗派はこの主義を形に現はしたもので、宗徒の數が一千四百萬から一千五百萬人あつて、それが五十乃至六十の宗派に分れてゐる。

而し露西亞人の特性のうちで一番自分の眼に付いたのは、彼等自身でUne Lengue franchiseと呼んでゐる所の、寬豁で得意げな率直である。文明の男女ともあらう者が、かくまで明らさまに、隱し立なく自分自身を表明することは他の土地では見られない圖だ。彼等はその理想や考を憚りなく口に上す計りでなく、時どき自分の經歷まで打敗けて了ふ。それで他人が自分の行爲に就て何な考を起さうと不關焉と云ふ風だ。殊に婦人に於て甚だ驚く次第だが、この開放主義の裏には恁う云ふ驕があるのだ。「俺は恁んな人間だ。御覽の通りだ。——寬豁な俺の性質では、遠慮深く隱しだてするやうな水臭い氣は出ないと云ふものだ。自分で自分の

身の判断が付かないやうな身の上知らずとは違ふのだ。』この意味を社交上に演ずると恁うなる。『俺は恁んな人間だ。貴君は何んな人間だか御話なさい。遠慮して何うなさる。生命は短し、光陰は矢の如し。御一緒の交際から利益をうる意ならお互に打明けやうではありませんか。』それでこの率直の裏には僞善に對する恐れ、惡みがあり、磊落に對する驕がある。――英人の强情、佛人の愼重、獨逸人の傲慢、丁抹人の馬鹿々々しさには似もつかないのいで。

その率直の基には寛豁に出來た自然性がある、輕躁でなく、偏屈でなく、冷酷でない所の。――是が露西亞の獨創を形造る物の基點である。併せて歐洲各國民の性癖中に獨一の性癖である。

いろ〳〵の經驗が證明してゐるやうに、露西亞人には極端から極端に走る傾向がある。露西亞人が一つの思想、理想、主義、乃至は目的を懷く時は、其れが自分から出たものであらうが、歐洲の文明から借りて來たものであらうが、其起源

などにはおかまひなく、最後の結果を見ざるまでは止まないのである。されば露西亞人は一方に世界一の壓制主義者であるとみれば、他方には最も疎暴な自由主義者である。また一方には己を殺して其宗派の信條に殉ふ程の盲目的正教徒であると思へば、他方には刺殺を企てダイナマイトを投ずる虛無黨員である。權勢を承認する時は、地に額づいて拜するをも拒まぬ。權勢を惡む時は、その惡しみのためには手に爆裂彈をも握る。彼等は信心にも不信心にも、愛にも惡みにも、服從にも反抗にも、何事によらず急進黨である。

最後に今一つ露西亞人の特性がある。是はその獨創の性質とは矛盾して見えるもので、模倣の趣向、國民性で受ける反響の力である。彼等はいかに異樣な物をも其趣味に融和させる力を有つてゐる。これが即ち物を理解し、また評價しうる最始最上の能力である。

かやうに國外のものを移し植ゑて自分の畑に育て上げる能力にかけては獨逸人

が第一に評判されて居る。いかにもそれに違ひない。が、露西亞人のそれとは趣が變つて居る。ヘルデルの天寵いや厚き、重々しくまた徐かな國民は、重々しくまた徐かにその國民の知性を進めた。彼等は他の國民に先つて希臘をもカルデオンをも沙翁をも知つた。而し是を再現し、其精神に於て活動する程深く他國の天才に染ことが能きなかつた。希臘人を知らなかつた佛蘭西人の方が、却て希臘人を解した。獨逸人よりも、其事業に於て彼等に近いてゐた。何れの國民にも優つて他國民の思想を解し、是を摸ね、是を自家の所有にする能力を有つてゐるのは露西亞人である。開化した露西亞人は斷えず諸外國の最も活き最も新しい流行思想を了解してゐて、古く安價になるのを待つ暇がない。彼等は羽で飛んでゐる新思想を捕へる。その文化はありとある最新なる物の香を帶びた新人を作る。今の世の中で偶ま自國に容れられない外國作家が露西亞の新聞雜誌の中で第一の承認を受けることは珍らしくない。頂度和蘭が文藝復興期の頃に故國を追はれた作家の

隱れ家となつたやうに、未來の舞臺で露西亞が同じ役割に廻らぬとも限らぬ。他の歐洲各國で棄てられた英雄崇拜熱が露西亞で今全盛だなどは全く其兆候だ。(譯者曰。奇警を以て一代を驚したニーチエの思想が最も早く最も能く吸收せられたのは同じく露西亞である。また一例として見るべきであらう。或はゴルキイの作物に、或はメレ、ジコウスキイの評論に入りて、自在に國民化せられ、個人化せられてゐるのは目覺ましい顯象である。)

かやうな驚くべき同化力はまた露西亞の百姓の手細工にも見ることが出來る。彼等は何んな仕事でも直に覺える。見る物を直ぐに眞似る。一人で以て拾の商賣を知つてゐると云ふものだ。或る旅人が一寸と異つた縫取の帽子を置き忘れて行つたとする。すると十年後には其型が全州に擴まつてゐる。また或旅人が何處かの隅に浮鏤の銅器か七寶をかけた銀器を捨てて行つたとすると、この遺失品が新工藝の起りになる。實に露西亞の工藝品の鉅匠とも呼ばれる者は皆百姓から自

力で仕上げた人達だ。宮室の陶器製造所の長になつたマスリアニコフはたゞの水飲百姓から起つて、弟子入をしたこともなく、全く自分の經驗と工風で以てあれだけに成つた。それから有名な莫斯科の鍛冶で、コオペンハアゲンの博覽會に透明な七寶燒を出品して名をうつたオブチンニコフだが、この人も自分の天才に賴つて名を成した人だ。彼の得意とした所は東羅馬帝國時代に行はれた燒藥を使つて肖像を燒くことで、また日本の七寶燒の秘術をも心得てゐた。

以上述べてきたやうな國民性がこの國に限つて發達した理由は容易く了解することが出來る。我等の前に横る邦は非常に宏大で、人口が稀薄で、敎育のずつと遲れた邦である。新しい移民と歐洲文明とを要する邦である。――頂度茫漠として未墾の土地の多いのは亞米利加合衆國のやうだが、政治は土耳古その儘だ。

此處は大きな冬の邦だ。寒さが及ぼす第一の影響は墮性である。それが遊惰の性質となつて現はれるので、あの國外にまで名高いゴンチヤロフの小說中の主人

公オブロモフは其代表者である。彼はその威嚴をも、その自負心をも、その戀人をも、その富をも捨てゝ全く平氣な程遲鈍で、遊惰で、元氣なく、疲れてゐた。

（譯者曰。ゴンチヤロフのこの小說が現はれて間もなく、ドブロリユーボフの『オブロモフ主義』なる評論が出たので猶更これが有名になつた。オブロモフ主義とは換言すれば遊惰主義のことで、豐唯にオブロモフばかりでなく、プシキン以降ツルゲエネフに到るまで、著名な作家の著名な作中の主人公は皆一種のオブロモフならざるはなしと言ふのだ。）

滋養に富んだ食物の缺乏は血液を薄くする。寒氣に對する保護の必要は神經質と成る。これから不活潑な性質が起るので、國民の遊戯にそれが現はれてゐる。西班牙人は人牛格鬪戯をやる、英國人は拳闘や短艇競走をやる、佛蘭西人は格闘をやる、波蘭土人は舞踏をやる――露西亞人は何にもやらない。彼等はたゞハンドオルガンやハアモニカを聞いたり、秋千に乘つたり、自分で發明した重力鐵

道に乗るのを樂しみにして居る。

露西亞の普通の人民なり上流社會の者なりが集つて物を食ひ茶を飲む場所には、必然一つの大きな、天井に達くやうな自働的のオルガンが具へてあつて、這入つて來た客は自分の趣味に適つた一曲を命ずる。そして厭かずその諧調に聞きほれてゐる。鞦韆は露西亞の祭禮には缺くことの出來ないものだ。而し重力鐵道の遊は最も露西亞人の趣味に適つたもので、自分では腕一本動かさず、たゞ乘つてゐれば充分に鞦韆が出來ると云ふ所がお氣にめすと見える。

公共の生活にも私の生活にも權力に服從するのは亦不活潑な性質の證據だ。然しこの不活潑の裏には消極的反抗力が潜んでゐる。專横主義は彼等を嚇すばかりでなく、その性質を固くする。そこで魯鈍が一種の理想となつて、不平なく忍耐し、辛苦し、死ぬことを知つて居る。その特性の大仕掛に現はれてゐるのはドストイエフスキイの、『死んだ家の記憶』で、憐憫を乞はずに鞭と笞の雨を忍び得

る者が此處では尊敬の的となつてゐる。——他の邦ならば鞭を下す者の方が寧ろ尊敬を受くべきだ。

露西亞人は勇敢で、戰爭にかけては最も持久の術に長じた國民であり乍ら、世界中一番に平和好きであると云ふのも此性質から出て來たのだ。露西亞の士官は階級に餘り意を置いてゐない。普魯士の軍人のやうに厭ふべき氣質がない。冷酷な傲慢心を有つてゐない。獨逸の士官となると、教育の優れた者までが、自分は一種の僧侶か何かのやうな自負根性でゐるものだが、露西亞の士官は冷酷な奴でも、他の人間と自分とは同等の者であると思込んでゐる。

この國民を頑固にし不活潑にした嚴烈い氣候との苦鬪と云ふ外圍の事情は彼等に二つの矛盾した性質を賦へた、——人の好いことと冷酷なこと。

一體に露西亞人は無情なやうでもあり、親切のやうでもある。自分の苦勞には冷淡であり乍ら他人の艱苦に同情を寄せるなどは其性質の一面だ。

露西亞の百姓は死に對して非常に冷淡である。自分で死ぬことを左樣に恐がらないばかりでなく、他人殊に老人小供などを殺すことにも平氣である。是が爲めに時としては慘酷な殺戮が慈悲も惡意もなく行はれることがある。トルストイの敎訓劇『闇の力』の中で小兒を殺す一段は其例である。

もつと好い例がある。次の話は露西亞の一將軍の口から談られたものだ。

クリミア戰爭の時に恁んなことがあつた。ある兵士が重傷をうけて喘ぎ〳〵其隊の後尾に隨いて行つた。何にせよ非常の重傷なので、兎ても助かる見込がない。同僚の者が氣の毒がつて言ふには、『お前は大層苦しさうだ、もう直に死ぬだらう、俺等がその苦みを止めてやらうか、地の中へ埋めてやらうか。』『どうぞお頼みだ』と不幸な兵士が答へた。そこで同僚の者達は其用意に懸つて土を掘つた。すると其兵士は自分で其中に這入つたので、他の者は土から彼を生埋にして了つた、——可愛相とも思はないで。

將軍は後で其話を聽いて、『さぞ苦しがつて悶いたらう』と言へば、兵士達の答に『否、埋めてから後で充分土を蹈み附けて來たから大丈夫です』。

恁樣な親切と殘酷の結合が露西亞の百姓の特性である。實際不思議な程であるが、その國の貧乏な百姓の無智の情態を知つた者には思半ばに過ぐるであらう。

外國の天然と劇しく戰はなくてはならないと云ふ事情から起つて、露西亞人には實用を重んずる性質がある。この點から觀ると、最も有名で最も代表的の露西亞人彼得大帝が好い例である。彼は自分の國の革新を思ひ立て、先づ機械的の製作發明を第一にした。外國へ行つても、學校などは訪はずに、工場と船渠を見物した。そして故國への土產には、解剖術、外科術、調劑術、機械術、造船術、土木術などを齎し、それから職工の一團隊を帥ゐて來たが、一行の中には學者や思想家は一人も雜らなかつた。彼は自分の手で一切の手工を練修した。皷手として軍隊へも這入れば、水先案內になつて艦にも乘つた。短艇も造れば、鐵も鍛へる、

彫刻までした。今でもクレムリンや莫斯科の宮殿の武庫に行くと、大帝自ら鐵砧から作つたと云ふ馬蹄や、鉢などが陳列してある。純血の『ムジック』の面影がこの偉人を通して窺はれるではないか。

頂度氣候の嚴烈が前から述べて來た種々の性質の原因になつたやうに、地勢の單調から露國一流の憂鬱性が生れたものであらう。露西亞人は憂鬱である。然かし故さらに孤獨にゐて氣難かしい顏をする英國人のやうではない。それは衆合を通しての憂鬱である。神秘教の宗派はこれから起つたものだ。

御存知の通り露西亞の領土は彼得大帝以來不斷に擴がつて來た。年年平均丁抹の領土位づつ增えた。西方の境には最早發展の餘地がないばかりか、却て危い位だが、亞細亞に接した方面は、まだ彈性があつて、年々東方と南方とに延びてゐる。是は珍らしい顯象である。かやうに廣い帝國が猶不斷に擴がると云ふこと、行く先々で新しい民族が直に同化されて、而も露西亞人が何時も、何處まで行つ

ても優勝者であると云ふことは、一寸と信じ難い程である。

是には原因がある。この帝國の地勢が與つて力あるものと云へやう。宏く限りのない曠野が古代から人民の間に移住の慾を起さした。彼等は他國の者のやうに北亞米利加などへ高飛びするのでなく、何時も自國の中で新しい領土を發見た。露西亞の百姓は漂泊に馴れてゐる。一日旅で市場に行つたり、幾週幾月を費してキエフの都へ巡禮に出掛けたりするのが習慣になつてゐる。今でも隊を組んではジエルサレムへ巡禮に出掛ける。そこで、彼等は甚だ能く移住に適してゐる。それが露西亞の國内に限られてはゐるものの、生れ故郷に執着する譯ではない。何處迄行つても自然は同じ調子である。幾週間の旅にも曠野の景色は何一つ趣を變へない。彼等は何處へでも二三日の間に新しい家を建てる。家財一切をそれへ持込む。新墾地でも舊墾地と同じだけの收穫が上る。恁うして彼等は冒險し、新しい經驗をし、新しい顏を見て其慾を慰めた。

茫漠とした曠野には斷えず彼方へ彼方へと人を誘ふ魔力がある。限りなき空想を起させ、漂泊の欲をさそひ、新しい渴きを呼び出して、行けども盡きない野末を追ひ極めさせやうとする。(譯者曰、長谷川二葉亭譯ゴルキイの作『乞食』の中に乞食兒レンカの空想が描いてある。『レンカは曠野が好きだ。晝間之を辿る時、行手を見やれば、空の丸天井が廣い曠野の胸に支へられてゐるやうで……あゝ、あの野と空と一つになる邊に大きな不思議な町が有つて、珍らしい善人計りが住むでゐたらパンなどは哀求らんでも濟まう、哀求らないで先方から呉れやう、など思ふ。……翌日になれば、又行手に曠野が茫々として眼前に自由の天地が開ける。すると又遙か彼方の野の末に今迄に見も及ばぬ町が潜んでゐるやうに思はれて、心に其光景を描いて見る。』)

土地の單調は露西亞人に放浪の嗜好を與へた。氣候の急轉は事物の劇しい變化に對する柔軟性を與へた。この第二の影響のために、露西亞人は精神上には可撓

性であり、また日常の動作は不規則で間歇的である。

かやうに露西亞人の性質には可撓性の所があるから、從て外國の影響にも感じ易くなる。露國の天才が模倣的になり、外國の物を受け容れる能力のあるのもこの可撓性の爲だ。恁う言ふ點から見ると露西亞人の同化力にはまた一種の獨創がある。獨創の缺乏そのものが、やがて一の新しい獨創の基となるのだ。

今までの露西亞は言ふまでもなく世界各國の生徒であつた。露西亞の國民は歐洲の何れの國民にもお蔭を蒙つてゐる。第一にこの帝國の基礎はスカンヂナビア半島の酋長によつて造られた。近世になつては東羅馬や土耳古の影響がその文明に烙印を捺して居る。それから一の國民としては、波蘭、獨逸、和蘭、佛蘭などへ弟子入した。最後に全歐羅巴から影響を蒙つた。是は拒むことの出來ない事實だ。今我等が聖彼得堡に立て以太利人ラストレリの設計した冬宮を觀、佛人ブアルコネットの造つた壯麗な騎馬像をみるとき、莫斯科に立てロンバアディやペ

ネチアの工匠の手になつたクレムリン寺院の壁や塔を見るとき、また其形から色から文藝復興期の以太利人によつて作られたと想はれる古代露西亞人の記念寺院バシリ、ブラゼムノイを觀るときに、扨て露西亞人自らは何を造つたかと云ふ疑問が我等の心中に起る。然しまた露西亞人は外國人を伴れて來て其精神を吹き込み、獨特な露西亞式を採用し發揮せしめたと云ふことも記憶して貰ひたい。

態樣に限りなく國外の文明を吸收して、今では一意專念に實を結ばせやうとして居る。そこで從て熱心が起り、天才を崇がめ、英雄を拜すると云ふやうな傾が生じてくる。

要するに渾な寬豁に出來た自然性（Shirokoyn mutura）から湧いてくるので。露西亞に Chernozión——黑土とか沃土とか譯すべき詞がある。この詞はポドリアからカザン迄、烏拉を越えて西比利亞まで一と續きに續いてゐる所の沃えた土の廣く深い帶を指すのだ。驚くべき肥沃なこの土は幾世紀間生へては枯れ生へては

枯れた曠野の草の腐つた爲めだと云ふ。露西亞人の富有で寬豁した性質は頂度この肥沃な地帶を思ひ出させる。幾世紀間棄ててあつて却て其富を增した所などは面白い對照だ。

露西亞へ行くと頂度その國の地味を代表したやうな男女に遇ふのは珍らしくもない。——快活で、福々しく、馴々しく、燃えないで溫いと云ふやうな所があつて、いかにも奧行の深いやうに見える。

莫斯科の某女子大學で講義を開いたことのある一外人が次のやうな話をした。

『頂度まだ其女子大學の在つた頃、自分はある午後その前夜講義をした講堂へ行つたことがある。椅子の位置を少し變更したかつたからで。自分は獨りでその廣い部屋の中に座つてゐると、入口の扉が少し開いて、一人の若い娘が笑ひ乍ら顏を出した。すると二三分經つかたゝない中に百人餘りの娘の子が皆黑い着物でやつて來て、自分の周圍に圓列を作つて手を打ち初めた。やがて其中にゐた有名な

詩人の忘れ形見の娘が自分に二言三言何か言つたかと思ふと、また皆んなで手を打つた。自分は其旅行中恁んな愉快なことはなかつた。』

少し眼の明いた者は、露西亞を旅行してゐる間に、頂度この話のやうな驚くべき質朴と溫情に逢遇するであらう。この受容性、生れつき富有な性質が最も露西亞で眼につくもので、やがて未來にこの國の最も發揮すべき獨創を語るものである。

黑き土地、沃えた土地、新しい土地、穀物の出來る土地――これがこの國の構成だ。寛豁で、快活で、富有で、溫かな性質――これが露西亞人だ。憂鬱と希望に滿ちた限りない廣袤、闊く深く測り知れない一物、新現實主義と新神秘主義の母體――これ等は渾てみな驚くべき程未來に適つたものだ。實際我等が斯の邦の秘密を窺はうとする時は、即ち歐洲の未來を窺つてゐるのではあるまいかと訝まれるほどである。

四

誰しも想像するやうに戸外に活動してゐる露西亞の人民を觀ることの出來る機會は至て稀である。あらゆる公共生活、會合、會議、團隊と云ふやうなものは御法度になつてゐる。――否や不可能なのだ。

然し適當な期節に露西亞を旅した者はその國の群集の特質を明かに識ることが出來る。

聖彼得堡では復活祭が人民にとつて一番樂しい期節である。「軍神の庭」と云つて非常に廣い原がある。祭の日には其處で觀兵式がある。其原に荒木造りの芝居小屋が四つか五つ並んで建つて、短かい幕合をおいて朝から晩までのべたらに野芝居が興行される。それから其附近には四期押通しの大仕掛な市場が立つて、取

りわけ休日などは御客やら素見者やらで大混雑する。

恁麼な安芝居にも這入れないやうな貧しい手合になると、たゞ小屋の前につつ立て觀てゐる。芝居小屋を取り卷いて張出の棧敷がある。白髮の千日假髮を冠り、長い白髯を附けて老人に裝つた一人の若者が其棧敷の上を彼地此地歩いてゐる。

――先生一寸腰を下して、棧架から兩足をぶら下げ乍ら客を呼ぶ。その男の喋舌ることがまた至て無邪氣で小供らしくて馬鹿々々しいものだ。――『俺等にうんと金がありや、朝飯にはこれ〳〵こんな物が食いたい、夕飯には何う云ふ物が食いたい（至て馬鹿げた物を並べる）』――すると、見物人がどつと笑ふ。『もし〳〵皆さん、夜寢床に這入時は靴をぬぐことをお忘れなさるな』――恁んな他愛のないことを並べ立てる。頂度自分達が六つか七つの小供を笑はせる時に言ふやうなことを喋舌つてゐる。

扨いよ〳〵中へ這入つて眞個の芝居を觀る。上等の劇場では『スボロフ』と云つて三齣から成つた國民劇を演る。時は午後の二時であるが、既う朝の九時から四たび繰返された。一時間宛で演つて了へるのだ。棧敷は小屋掛けの至て簡單なもので、荒削の木の長椅子が列べてある。觀客と云へばみな平民のそろひで、婢僕、近邊の田舍から出て來た百姓の男女、場末の小商人の夫婦などである。默りきつて、露西亞一流の沈默のうちに、彼等は幕の明くのを待つてゐる。

スボロフは露西亞固有の名高い英雄である。舞臺から少し離れて、昔の羅馬風の裝束で、脛を出した古風な彼の肖像が立つてゐる。露西亞の將軍とは思ひもつかない像だ。よしんば亂暴な所作にもせよ、まだ出でくる俳優の方が、この像よりは實際のスボロフに近いやうだ。この英雄は全く生粹な露西亞の變り者で、露西亞の將軍中の將軍と言ふべしだ。哲學流の宗教的見地からトルストイが『戰爭と平和』の中で金箔を附け理想化した惰け者クツゾフはバアクレエ●ド●トリイの戰術を模ね、偶然の事情から提利を得た白痴者であつたが、スボロフこそは眞に

軍事上の奇才、寡を以て衆に當るの勇者であつた。彼が以太利から瑞西に渡つたアルプス越えの冒險は、ハンニバルやボナパルトのそれにも增した壯圖であつた。

この芝居に仕組まれたスボロフは徹頭徹尾その國の長老である。露西亞魂の上から、彼は其勇氣と捷利の爲めでなく、その父老としての性質から謳歌されてゐる。それで――いかにも露西亞人の趣向を能く示したものだが――戰爭が主題であり乍らこの劇では烟一つ揚らず、彈丸の音もしない。そればかりか觀客が驚きと驕りの眼で見るスボロフは、古く擦れ切れた軍服で、普通の兵卒と同じ裝ひをし、兵糧を背の行李に擔つて、兵卒と同じ場所で同じ食物を食べてゐる。萬人の父である。

スボロフに就て能く知れてゐる逸話がある。彼は朝起きると――何時も誰よりも一番先きに起きる――必然其傅輩を呼び覺ますに鷄の鳴聲をする。「こけこつこ將軍」(General Cock-a-doodle-do)として彼の名は露西亞の全軍士に響いてゐた。

この芝居ではその特徵が亂用されてゐて、將軍が大聲にこけこつこうを叫ぶこと無量三十たび、初めの幕でその功用をさへ演べ立てるのである。そして將軍のこの叫びは何時も觀客の喝采を以て迎へられる。それからまた彼が一兵卒を捕へて爾の義務を果したるとき、爾は將軍の如く善しと言つて、其手を差し出す所がある。――休戰の旗を持つて來た正裝の士官を送り出すと、其士官が彼の野營の至て粗末なのに驚く場がある。――彼がその部下を慰め、彼等と戲れる幕がある。今この芝居を他の邦の國民劇に較べて、名高い將軍同士を並べて見ると、後者ではベンガル光で照された突飛な掃撃が其特性であるのに、前者は長老的質朴と、上官と部下の親子的關係に力を入れてある。是は眼立つた相違だ。

同じやうな族宗關係の光景が復活祭の日には廣い街中にも見られる。帝國女學校の上級の若い姫達が宮室の馬車に乘つて長い列を作つて練り歩るく。何も眼を悅ばせる物の在る譯ではない。立派な宮室の馬車に乘せられて、宮內省の法被を

着た別當と馬丁が附くのが何よりの驕だ。

是には恁う云ふ譯がある。皇帝はこれ等の小供の高貴な親と云つたやうな關係に立つてゐる。皇帝が一年一回これ等の貴族の子弟の學校を見舞ふ時に、好意の徽章として其ポッケットから手巾を落す習慣になつてゐる。すると、姫達が我勝に之を握み合つて、片々に引き裂いて、皆んなで其一片を取る。それから皇帝はそのうちで一番優れた少女を引き拔いて一緒に學校の食卓に就く。皇帝の箸の付いた皿を貰つた少女は非常の光榮なことになつてゐて、喜悅を滿面に現はして其餘り物を飲み込むと云ふ習慣なさうだ。然るに茲に亞歷二世を驚倒さした一珍事がある。帝が臨御の折、その學校で一番優れた生徒として、同じ食卓に就かした波蘭の一少女に——自分は直接に當人から其話を聽いた——帝自ら焙肉と馬鈴薯の皿の餘りを授けると、少女は給待をさし招いで、しとやかに其皇帝の皿を渡した。

どの都會にでも、生粹の露西亞風の喫茶店があつて、普通の人民は此處に集る。そこには彼等の趣向に協つた諧調を仕込んだ「オルガン」が据えてあつて、彼等は茶を喫み乍らそれを聽くのを何よりの樂みにしてゐる。それからまた其處には職工や百姓が金曜の休み日か、それ共氣のくさ〳〵した日に「ハーモニカ」を持つてやつて來る。この樂器は弄び易い所から昔の「バラライカ」に代つて重寶がられてゐるのだ。自分は嘗てスモレンスクで見た光景を今だに胸に覺えてゐる。ある若者が少し醉氣味で、街の中を蹣跚乍ら、至極滿足の體で、小風琴を鳴らし鳴らし行く。街の人は皆窓から顏を出して笑ひ乍ら見送つてゐる。自分は其時トルストイの『闇の力』の中にある風琴の務める役割を思ひ出した。それからまた、何とはなしに、その昔羅馬の街の中を六弦琴の音に合して跳つて歩いた若者の樂しい群や、獨逸の四段歌を聯想せずにはゐられない。初等な、發達の半ばにある音樂の悅樂は恁樣な所にあるのだ。かうした樂みの溫和と純朴の中には疎野と魯鈍な

悲みが結び付けられてゐる。

露暦五月一日に自分は莫斯科の附近で、毎年サコルニキの公園で行はれる有名な國民祭を觀る機會を得た。この公園と云ふのは丈の高い檜の森で、廣い馬車道が縱横に開けてある。大四辻から七つの大通が四方に延びると、またその一つ〳〵の大通を幾條かの横道が連いでゐる。その他にも數知れぬ小道があつて、それの盡きる所に露西亞瑞西式の阿屋が建つてゐる。

五月一日に於けるこの公園は頂度「コルソオ」(Corso 以太利の競技場)の類のもので、それに行くには數日前から馬車を備つてゐなければならない程人出の繁いのであるが、それが露西亞風の排置のために、全く「コルソオ」的の特質を失つて了ふ。暴民を鎮めると云ふ主義から、何の道も何の道も、街からずつ、ずつと續いて、二三十歩おきにコサック兵と騎馬巡査で護衛される。その上にも取締の行きとゞく爲めにと云ふので、公園の中では馬車の列はお互に横ぎるべからずと決めた。

その癖空地は充分にあるのだが。それが爲にこの祭禮には「コルソオ」のやうな雜多な觀物で眼の保養をすると云ふ譯には行かない。高々御者の脊か馬の後尾が見える位のことだ。―― それから今一つ貴君の御婦人の顏だけが。若し貴君にして一人を携へる程の幸福があるならばだ。

公園には廣い芝地の上に普通の人民が大きな群々に集つてゐる。然し歌も鳴物も聞えない、叫めきもなく響も立たない。彼等は全き沈默のうちに遊んでゐる。其處には重力鐵道が具へてあつて、頂度夜中にやる橇乘りの遊びのやうな快感を與へる。靜寂と狂奔のとり交ぜが國民性の狂熱相に適つてゐるのだ。それからまたこの國の情熱的な一婦人が案じ出した露西亞人得意の詞Ariba!「火走れ」(Fire away!)に答へてゐる。次に第二の特有な遊戯は鞦韆の種類であつて、これがまた露西亞人の貧血的な氣質に相應いものだ。またこの土地では我等丁抹人が公園の春遊びに樂しみ交すやうな戯談が聞かれない。それにまた我等の國では首府の

外では見ることの出來ないやうな社界の階級を分つ線が此處では截然と引かれてゐる。

倫敦や巴里や伯林のやうな大都會になると、博物館なり何なりの敎育機關が具はつてゐて、それが普通の人民で滿ちてゐて、觀覽人はそれ相應の見學をするのであるが、露西亞には一寸恁うした類の物がない。聖彼得堡の「ハアミッテエジ」博物館には隨分と貴重な美術品が澤山集めてある。然し入場が難かしくて、見物人は餘り無い。莫斯科にある幾つかの博物館も開場が到て稀で、敎育品には乏しい方だ。大都會の紀念物にすら敎育的のものが皆悉無い。それ等は皆んな皇帝や將軍やその他の國民的英雄を崇め祭つたもので、唯だ皇帝を神聖にし、國民の自負心を增す爲めに作られたものだ。露西亞人の對外的反抗心は今日でも極端で、ファルコネットの作つた彼得大帝の小像を持つことすら不忠の徵章と見られる。彼得は西方人だ、歐羅巴人だ。

皇帝でもない將軍でもない者の銅像が聖彼得堡に唯つた一つある。それはお伽噺の作家クリロフの飾氣ない到て地味な肖像で、小供の遊び場所の「夏の公園」に建つて居る。丁度ロオゼンブルヒ公園のハンス、アンデルゼンの肖像に當るのだが、露西亞の物の方が出來が好い。そして其臺石に彫りつけたいろ〳〵な動物の群の浮彫が能い慰藉物で、丁抹の物程美術的ではないかも知れぬが、此方が勝つてゐる。莫斯科にはこの邦を波蘭の治下から救ひ出した二人の恩人ミミンとプリンス、ポザルスキイの肖像があつて、一六一二年から祭られて居る。ノブゴロッドにもその紀念碑がある。その他に最つと新しい物ではプシユキンの銅像が建つてゐるが、餘り感心されない出來ばへだ。スモレンスクは作曲家グリンカの生地とあつて、其肖像が建てられてゐる。肩の張つた小作の男だけに、どうも彫塑には不向の方だ。然しその像を取卷いた鐵柵に華奢な十文字を組んで、その人の名高い作曲を樂譜で現はした手際は見事なものだ。

他の歐洲各國では、全力を盡さない迄も、その國民の教育には何等かの手段を施してゐる。然るにこの國の政府は教育の普及を厭つてあらゆる妨害をする――いや反抗までする。曩にも述べたが、この國の都會には他の國の都會と異つて普通の人民を教化するやうな機關が具はつてゐない。田舍は猶更のこと、知識に對する防戰が一層激しいので、人民の天賦の秀れてゐるにも關らず、恐ろしい無智が蔓こつてゐる。實際今でも人民の眞知識を妨げて、個人意志獨立意志を殺さうとする主權者の努力はニコラス一世の治世と異らないのである。

露西亞では三種の書物が發刊される。第一が禁制品、是は殆んど總ての有益な文字を含んでゐるので、偶々巧妙な手段と忍耐とで、露西亞官憲の要求に容れられるやうに作り上げたものだけが法網の目をくゞる。第二は禁止に逢はないもので、極く惡氣のない柔かい文字と純粹の專門書だ。最も之にも制限があつて、例へてみれば獨逸のマイヤアやブロックハウスの百科全書では露西亞に關するあら

ゆる項目は抹殺されて了ふ。誰にも知れきつた事項ばかりで、隱し立するほどのものでもないのであるがその昔かれた精神が惡いと言ふのだ。恁うしたおせつかいは外國のものにまで及ぶ。去年露西亞から自分の處へ送つてきた佛蘭西文の書物は中を一枚切り拔かれた。前後の關係から察する所、何でも之には死んだ皇后のことで、さう不都合でもなく、去りとて全く都合の好いでもないやうな事項が書いてあつたものと見える。第三は普通の人民の學校で使ふ教科書で、それが何んな性質のものだかは玆に言ふだけが野暮であらう。

國民の知識の度合の高まるのをひどく氣にする所から、其掛念が嵩じて、最幼年者に課する到て初等な教育にまで邪魔を爲たがる。數年以前のこと、さる高貴の家柄で、アレクサンダア二世に仕へた有名な宰相の娘に當る物持の貴女が、自分の住んでゐる田舍に孤兒院を建てたいと出願した。この貴女には革命的の素質があるではなし。百姓を煽てて異文明を仕込んで、不法な罪過の途に人を導くな

どとは夢にも思へないのであるが、二年間嘆願してとう〳〵撥ねつけられた。恁麼場合には許可を願ひ出すのが規則で、そして恁樣な請願はいつも許されないのが常軌だ。

恁麼有樣であつてみれば、露西亞の百姓の情態が何處から觀ても深い無智と亞細亞的屈從心の印象を人に與へるのは、敢て驚くべきことでない。

貴族の貴女がその持領に歸ると、皆の百姓や職人、それから下々の老若の女が其足もとに寄りついて、地の上に平俯つて辭義をする。何か賴み事のある者は別として、御機嫌伺の者までが膝をついて大道の砂塵に額を埋める。何う說かうとも彼等のこの習慣は容易に改まるものでない。今日でも皇帝に請願することをChelobitnaya と言ふが、之は大地に額を打つと云ふ意で、明にその字の出所を示してゐる。

無智なだけ迷信も强い。

それが亂れた時代には屢々怖ろしい事件を牽き起す。ニコラス皇帝の治世に聖彼得堡で始めて虎列刺が流行つたとき、無智の町民はこの傳染病の起原に不思議な因緣をつけて、四五人の小供をめちや〳〵に亂打した。その小供達がネバ河に虎列刺を流し込んだと云ふので。またある市場では、虎列刺の粉を人の家に拋り込んだ二人の惡人を巡査が縛まへなかつたと云ふことで、警察を相手に大騷動が持ち上つた。丁度その時ニコラス皇帝が欅に召してその場を通りかゝる。この騷動に嚇として、龍眉を逆だて玉手を高く昂げて、大音聲に制し給ふ、「下に下に！」皇帝の紀念碑の臺石に彫り附けてある光景は正に是だ。

迷信は今日まで續いてゐる。自分が滯在してゐた中央露西亞の或る工場地では、是れ迄復活祭の後の日曜日には、必然雷が落ちるか、他に何か災害があつたと云ふので、今年は天の怒を鎭めるために、數哩先きの精舍の僧侶に賴んで、そこに鎭座ます『三手の處女』の像を借り受けることにした。この像は靈驗の顯

たかなので其界隈で名高いものだ。いよ〳〵それが持ち込まれる段になると、大した儀式で、特別列車をしたて、坊さん達の讃美歌と廻燈籠に伴れられて乘り込んだ。その時の停車場の群集と云つたらまた非常なもので、プラットホオムの前方にゐた者は、危く轢き殺される處を、漸く列車の中に飛び込んで難を逃れた程であつた。像は寺に持ち込まれて、「テ、デイアム」の讃美歌が歌はれた。その日は嵐も何もなくて濟んだ。唯一人聖像の靈驗を疑ふ者は無かつた。

この地方の勞働者は皆な假小屋の中に住んでゐて、一つの狹い部屋の中に百五十人からの人間が寢る。その部屋には、丁度船室と同じやうに、壁に沿つて棚掛の寢臺が出來てゐる。唯だ頭を壁につき付け、足を部屋の中央に差し向けて寢るだけに廣くなつてゐるのが異ふ。部屋の中は何の風情もない——枕も絨氈も机も椅子もない始末だ。先づ犬小屋同然だ。それと言ふのは、この地方では大きな工場を目的に幾百人からの勞働者を養つてゐる數多の人夫請負人があつて、いざと

言ふ場合にはさつさと要るだけの頭數を繰り出す仕組になつてゐるからだ。平常の喰物は半煮の粥が主で、喰はれないやうな麵麭と飲まれないやうな「クワス」酒が附く。

恁麼假小屋の一つを見舞たことのあると云ふ女醫者が次のやうな話をした。一人の女が小さい部屋で産褥に寢てゐると、その側に八人の男が轉々してゐる。自分が行つて、女に産をさせるためにその人達に退居を請ふと、彼等はその場の意味を呑込んだと見えて、ちよつと肩を振つて、寢に行つて了つた。

心棒を造るこれ等の工場で廉い職工が一日三十四錢、その上が五十四錢、一番高いので八十六錢貰つてゐる。

時代の進んだ理想を衆人に傳播するを自分の天職として努めてゐるこの邦の若い男女が、敎へもし賴りもせなければならないのは、實にこれ等の人間的物品だ。勿論敎化も捗々しく進まう筈はなし、賴みの綱も至極心細い次第である。

ツルゲエネフの『散文詩』の一節で、官憲のために其うちから省かれた二つの短かい會話がある。――題は『職工と白い手の人』と言ふのだ。

第一の會話では、一人の職工が、自分達を尋ねて來て、その仲間だと言うてゐる見ず知らずの客人に驚く所がある。そして垢と「タアル」の香のする其手を差し出して、客人の白い手を指して、『卿の手は何な香がするか』と聞く。『嗅で見給へ』。『變だぞ、どうも鐵の香のやうだ』。『さうだ鐵の香だ、この手には全六年間手錠が掛つてゐたのだ』。『それはまた何うしだ譯で』。『かうだ、俺は卿達の幸福を考へて、不憫な者達に自由を與へやうとして、卿達を苦しめる奴原に反抗したので、牢獄に入れられたのだ』。『牢獄に？』。『さうとも』。『そりや卿が官憲に反抗ふから惡いのだ』。

第二の會話は二年後の出來事で、同じ職工が其仲間と例の客人の噂をしてゐる。『彼奴も今日とう〳〵絞首られるんださうで、宣告が廻つたとさ』。『また官憲

に反抗ひでもしたのか』。『さうさ、矢張行つたんだ』。『よしきたドミトリの兄貴、俺は恁んなことを聞いてゐる、人を縊つた繩は家に持ち込むと幸福になると云ふから、一番彼奴の絞られた後の切片を拾て來やうじやないか』。『さうだ、ビョオトルの兄貴、試つてみやう』。

實際恁うした手合が、所謂『平民の中へ行く』若い男女の敎へ導かねばならぬ人間の物品なので。彼等は疲れず勇ましい熱心――讃めやうに詞もなく、何の邦にも比類のない熱心で以て之を行る。その親兄弟を棄て友を棄て、餓え凍え、惡まれ嘲まれ、輕蔑と耻辱とに其身を晒す。自分の良心の稱讃を唯一の報酬にして、獄屋も病も死も恐れる所でない。または、何んな名譽が前途に待てゐやうでもなく、其事業は隱れ、其提拱は認められずに了む。況して其生涯は苦闘と辛酸の連續であるのだ。

これ等の人々は所謂『インテリジエンチア』Intelligentia のうちで外部に活動す

る方の分子である。『インテリジエンチア』それ自らは、信念の上から一個の別世界を作つてゐる。その主持する道德には時に不穩の件がないでもないが、然し他の歐洲各國で一般に道德の名の下に行はれてゐる商賣的和合などに較べるとずゝと貴ぶべきものだ。――生粹な若々しい世界で、火のやうな青春の渴仰と艱苦にもめげぬ露西亞一流の消極的勇氣に滿ちてゐる。それで其歷史的使命に對する信仰と自分の信念力の確信とがその團體を支へて行くのである。

幾つかの革命運動に首領の一人であつたチコオミロフは今巴里で放浪の生活を送つてゐる。彼が見聞した種々の事件について語る所は信賴して聞くことが出來る。彼はその著書の中で一人の若い囚人の話をして居る。この男は獄屋の中でも何時も頑强で、例へば囚徒同志互に話をしたり一緒に散步したりすることを許されたいと云つたやうな、出來ない請願ばかりしてゐた。『どうも反抗の必要がある』と口癖のやうに言ふ。『然し卿は何が出來ると思ふ？鎖と錠で縛られてゐる身體ち

やないか、何うして官吏共を凹す力をうる意だ』恁う仲間の者が尋ねた。――『何だ力だつて！お前の中にも俺の中にも力がある……俺は、俺自身が、力だ』。――『然し君、その力は他の者が眼の前で速ぐ粉碎くことの出來るものだよ』。――『試しに粉碎いて見ろ、俺が最先に出る、彼奴等に試らしてみやう』。

疑もなくこの不可抗な性癖が露西亞の革命派の强味であらう。

露西亞の囚人の堅忍不拔な樣を知るにはドストイエフスキイの『死んだ家の記臆』を披くに限る。彼等は笞の雨を不平もなく愁嘆もなく浴びてゐる。近頃でも國事犯の囚人で、その一味徒黨の計畫の發覺を怖れて、好んで死に就いた例は幾らもある。又物に事を缺いて、ある者は石油を飲んで死んだ、また或る者は玻璃の切片で咽を切つた。

この國に行はれてゐる革命思想に就ては既に廣く諸外國に知れ亘つてゐて、誰も注意を拂ひ、好奇心に耳を聳立てゐる。我等は是を虛無黨員と稱ぶ。歐羅巴の

地方に隠れてゐて其數は餘り多くない。露西亞の國内で想像されてゐるやうに、總勢五百人もあらうか。多少自暴氣味もあらうが、何でも爆裂彈と凶器を用つて、一騒動起すやうな苦心に凝つてゐる。然しこの國の到る所に播がり、あらゆる階級に侵入していろ〳〵と廣い範圍に其力を植えてゐる虚無黨的勢力なるものは、この團隊とは大に趣が異つてゐる。是は外の歐洲各國で新しい思潮とせられてゐるものとさしたる違がない。取りも直さず、我等が今日正統の進歩、宗教、結婚、財産と呼んでゐるやうな萬般の現存せる社會制度に對して深い懐疑を持て生れ出たものだ。

虚無黨と言ふ詞はツルゲエネフの『親と子』から流行り出したものだが、今は其黨員すら恁麼古めかしい名稱は用つてゐない。其黨派の起原は、抑がニコラス皇帝が崩んで、極端な專制政治に寛和の來た頃からである。奴隷開放も間近に見えてゐる、況して一治世の間魔睡劑をかけられてゐた思想が一時に自由になり、

政府の婢僕であつた言論が、許されてかそれとも内心の必要からか、兎に角開放されると云ふ機運に向つた。苟しくも人間の聲の響を有つたものは純然たる理想か反對論、それともあらゆる傳承の權威に對する叛謀の他はなかつた。青春の憤と情熱のために、彼等はその無經驗と一緒に塀の外に出た。若い男達はその長い髪を梳らず、其手も洗はずに、異樣な服裝をして街へ出た。また若い娘達は髪を短かく結ひ、粗末な着物を着、百姓の用ふやうな無作法な詞を用つて、その獨立を表はすのであつた。社會の古い傳説、僞善、習慣に對する憎惡は極端に走つて、從來神聖視せられたものは、その受けた尊敬が氣に適はぬと云ふので、何もかも排斥されるやうな有樣であつた。

然し恁樣な時代はほんの短い間であつた。詩人ネクラゾフは（その『讀書室』の中で）一人の子をして其父の不平に答へさせてゐる。『虚無黨員とはいかにも拙い名です。然し貴父がこの詞の中で自由思想を持つ一人の男を考へて戴きたい。そ

の男は他人の厄介になつて飯を喰ふ男でない。自分で働いて喰ふ男です。それで眞理を求めて、無意味な生活から離れたいと思つてゐる。世の中の鄙劣漢を睨み付けて、時に依つては一撃を喰はせることもある。――恁う云ふ意味で解釋されるものとすれば虚無黨にも別段悪い所はありますまい。恁う云ふ意味で自分も確かにその黨員です』。

現在では青年の不平黨は自ら Nyelegani—法外人と命んでゐる。この團隊の眞相を窺ふには先づ第一に古いバザロフ(『親と子』の中の)を忘るべしだ。彼も一時は時代の生んだ子であつたが、最早生存へてゐない。それから『處女地』の中の青年、これは外國産で、眞の代表者でない。然しその上にも念入に忘るべきはドストエフスキイの『魅いられた人』の主人公で、著者が若い時分に迷ひ、其後捨てて了つた一種極端な革命主義のポンチ畫とも云ふべきであらう。それで是等の青年のことを書いたものは露西亞には一冊もない。この國の官憲の許可を取て、

所謂法外人に同情を持つた記事を公にするなどは駱駝が針の目を穿るよりも難いのである。

質素な服裝をした一人の聰明な若い娘が、オレル地方の或る田舍町にやつて來た。寫眞から死んだ者の肖像を引延すつまらない生業で其活計を立ててゐた。彼女はずつと若い頃から他の娘達と一緒に百姓の間に雜つて讀書の業を敎へ、百姓の妻に裁縫を敎へてゐた。それで一生百姓の間に住はうと思つてゐた。所が警察で是等の娘達を捕縛へて、一人一人に離して、遠い所へ送つた。この娘はボロガ地方の小さな町にやられたので。此處で彼女は矢張追放されてゐたビエラ●サシュリッチと知己になつて、數年間一緒に暮してゐた。恁麽な風で彼女はとう〳〵革命思想に傳染れたが、取り分け其地方の貴族や金持を嫌つて遠ざけてゐた。が、段々と酬染になるに伴れて、彼女が信用し始めた一人の貴女がある。娘は言つた、『貴女は人間らしい、私共の一人と思ひませう』。

恁麼な若い娘達の多くは質素で、何らかと云へば醜い方だ。全く情を解せないやうでもある、自分の理想で確まつてゐるのである。百九十三人の執刑と云ふ名で行はれた有名な國事犯の審判に見物人として列なつた數名の貴女の報告がある。その犯人の中に雜つてゐた女達は、皆な痔せて、眞面目くさつて、寢れてゐて、蒼白い顏をした尼のやうであつたが、たつた一人奇麗な娘が雜つてゐたと。

露西亞の所謂「インテリジェンチア」の仲間で行はれてゐる若い男女間の交際の自由なことは、佛蘭西や波蘭とは全く反對である。兩性間の交際が恁くまで自由に觀られる所は他にはない。露西亞の進んた社界では二人の男女が伴侶になるなどは誰も怪まない。誰もその爲めに二人の間に怪しい關係が結ばれてゐやうなどとは信じない。殊に佛蘭西などのやうに、男と女の出逢ふときは、肉慾の發作から何時も接つき合ふものだなどとは毛頭思つてゐない。露西亞の母親は平氣でその娘を若い男の側に手離して置く。世界の中でもこの國の良い社界ほど男女間

の關係に無頓着な所は他にはなからう。

一千八百七十年にブウルバキの軍隊が瑞西の國境を越したことがあつた。無理な進軍の後で、兵士達は雨に晒されて街道にその夜を明すのであつた。その時、女ばかりの家で彼等のために戸を明た所はなかつたが、唯だ二人瑞西に留學してゐた露西亞の娘が、自分達のたつた一つの部屋を兵士に貸した。それで一晩中彼等と一緒に過ごして、世間での愚かしい皮肉な評判などは氣にも懸けなかつた。他の國では戀の關係ばかりが若い男女の中を結ぶのであるが、この邦の男女の學生は二人の趣味の似合つた點から、未來に對する理想や計劃の同じである點から友情を結ぶことが珍らしくない。戀も自然とその友情の一要素ではあらうが、全く缺けてゐることのないでもない。革命に對する知識上の好奇心と青春の情熱とは比類なく熾んなものだ。

然し是等の女達でも人間並の生活を嫌つてゐる譯でないことは思はなければな

らない。アナトオル、ルロア、ブユウロオはその露西亞に關する著名な書物の材料を曩の革命黨であり今では強い保守黨となつた一小團隊から得たのであるが、彼は虚無黨の女達を無秩序な別天地に住んでゐる者だと述べてゐる。『自由戀愛』の主義は變じて『猿仲間の生活情態』になつたと。それで著者は慫くべき確認を以て、是等の獸的團隊の中にも時折は主義からくる自由の行爲を戒めてゐる貞操が發見されると言つてゐる。

チコオミロフ（一八八六）はこの著者に反對の意見を述べた。自由戀愛――それは歐羅巴の人々が考へてゐるものとは異つてゐる――は久しい以前から全露西亞の「インテリジエンチア」が承認してゐる主義である。――最早議論のない主義で、丁度信仰の自由や出版の自由が問題にならないと同じことだ。チエルヌイシエブスキイが主作『何をすべき』（一八六三）を書いたとき、否や實質はアレサンダア、ヘルツエンが小說『誰を咎むべきか』（一八四七）を書いた頃から、この

問題は（道德上からは）既に解かれてゐた。他の國のやうに露西亞では、戀愛はたゞ肉慾的のものとばかり思はれてゐない。實際露西亞の「インテリジエンチア」のうちには眞銘の戀愛崇拜が行はれてゐる、――神聖なものとして、それ自らが正當なものとして。

で、此邦の男女の間では形式的の合法の結婚と云ふものが、餘り尊重されてゐない。また生活問題から結婚を視るやうなことは至極稀である。それで忽かしく結婚して了つて、後で後悔の起つたやうな場合があるとそれに對する同情が可笑な色を帶びて現れることがある。何かの事情で夫婦間に非常に氣質の違ひのあることが譯つた場合などは、お互に相手に自由氣儘をさせて、たゞ良いお友達として日常を送るやうな場合は珍らしくない。この邦の娘達は他國には珍らしい程に、人生に對する理想を有つてゐる。無意義な生活を送ることをば喜ばない。冷靜に肉慾的に彼女の身を任せたり、利益のために結婚したりすることを慚ぢて居

る。それでゐて、一旦ある男と眞面目に戀し合つた場合には、親の許可も受けず、法律上の形式も踏まずに、さつさと其男と關係を附けて了つて慚とは思はない。況して他の邦の女のやうに世間の取沙汰などに頓着してゐない。

恁やうな精神上道德上の態度は、穉氣や無分別から來た譯ではない。統計によると、自分から進んで、追放人に隨いて西比利西まで出懸て行く女が年々二千人からある。數年前、有名な醫師のワイマル博士が、刺殺の隱謀に累はつて流刑に處せられた時に、高貴な位置にある男爵夫人のレービンデルが其後を追つたことがある。

所謂『平民の中に行く』運中が、壓制や障害からその家庭を逃れやうとする場合には、隨分思ひ切つた方法を採る。今日は餘り無いが、一時贋結婚と云ふのが流行つた。若い女が丁度年頃で自分と意見の合つた男を發見けて形式だけの結婚をする。然しその男は決して彼女の自由を妨げないことにして、それで以て自分

の家庭の看守から離れる。時としては、その二人が段々と知り合つて、遂には實際に結び着くことがある（ギレンベルヒ夫人の『明夜』にあるやうに）。それからまた男の方で其形式上の權利を厭がつて別れるやうなこともある。普通恁樣な夫婦は、お互に自由で獨立であるべき爲めに、結婚の式の濟次第別居して了ふ。ツルゲーネーフの『處女地』で、女を伴れ出してから後のネズダノフとマリアンネとの仲を兄妹同士と云つたやうに寫してあるが、それが恰度贋結婚に類似の場合だ。

是等の若い女達が何れ程人民に同情を持つからと言つて、自分の生れた階級を脱け出してまでも、それ等の男を戀したり結婚したりすることは始ど無い。若し恁樣な場合が起つたとすると、結末は大概不幸に終る。私の知人の間に次のやうな例がある。上流社會に育つたある娘が同じ社會の一青年に戀をした。ところが二人とも行政上の處罰を蒙つて、別々に西比利亞の兩極端に流された。二人の間

の音信は全く斷れて了つた。數年後、その娘は自分と同じ政治上の犯罪で流刑地にやつて來た若い職人と知合になつた。彼等は毎日のやうに逢つた。男は熱心にその娘を戀ひ慕つて、終には子までこしらへた。兎角するうちに、他の流罪人の群が本國への歸途にその町へ立寄ることがあつた。そのうちにゐた一人の青年は、娘と同じ階級の者で、彼女の昔の戀人の消息を知つてゐたので、彼女はこまごまと厭かずその人の事を尋ね尋ねした。彼等は終夜對ひ合つて、その話をした。すると曉け方、女がその子を懷いて坐つてゐる處へ、かの職人がやつて來て、嫉妬の發作から、彼女を殺して了つた。『自分のやうな者と一緒になり下つたのを女は悔いてゐるに違ひない』と、斯う男は思ひ込んだのだ。それから二年して、赤子は聖彼得堡にゐる娘の兩親の處へひきとられた。

コロレンコウの書いたもので、禁止を喰つて出版せずに了つた『奇怪』と云ふ小説があるが、特別に面白いものであるから梗概だけを次に紹介する。

ある女が遠い所へ流刑に處せられて送られることになつた。この若い貴女に隨いて行つた一人の憲兵がこの話の話者になつてゐる。彼女は何處に送られるか豫め知ることを許されてゐないので、二人の憲兵が西比利亞のはてまで隨いて行つた。そのうちの一人は無教育な者ではあるが、容貌の立派な男だつた。彼は女の若若しさと愛くるしさに牽きつけられて、彼女を戀慕し初めた。彼は自分の奉じて居る命令が守りきれなく爲つて、とうとう行先を女に知らせて了ふ。『よろしい其處には我々の同志が多勢ゐます。』、斯う女は言つて、先方に着くや否や、彼女の知つて居る、然しまだ見た事のない青年の宿に行つて了つた。そのうちに彼女は肺病を煩つて床に就いた。

一箇月程過つた後で憲兵はまたその町を通つて、彼女を搜し當てたが、件の青年が彼の女の病床に伴いて居るのを見た。そして、彼女と尙今日までも形式的なmonで互に呼び合つてゐるのを見て驚いた。どう云ふ羈絆が彼等を結びつけてゐ

るのか憲兵には分らなかつた。勿論戀でない事だけは明らかだ。さりとて主義の朋と云ふやうなことは彼の理解力の範圍外であつた。そこで彼は自分の戀を娘に打明けた處が、非常な劍幕で斥けられた。彼女は男としての彼を嫌つてゐたわけではない。たゞ彼が憲兵であると云ふ上から、主義の上から、彼女がその生命を捧げて居る道の上から惜んだのである。彼女の眼から見れば彼は人ではない、たゞ惡逆な權勢の手にある一つの道具に過ぎない。あはれな憲兵にはそれらの事を薩張呑み込めなかつた。

歐大陸にその名の響いてゐる一作家が、斯樣な青年と交際つた時の話を私に聞かした。「十年程前、私が伯林に住まつてゐた頃、私はよく露西亞の不平な青年男女から手紙を送られた。何か小冊子を書いて呉れ、さうすればそれを譯して百姓の間に配るつもりだと言つて寄越す者もあれば、私が嘗てある有名な革命家のことを書いて出した本――その本で私は露西亞の青年間に人望を得たのであるが

――に就て尋ねてくる者もあつた。若々しい純白な光が紙面に輝いて居るものも、尠くなかつた。が、そのうちに年少者の熱心と雄偉な文體と併せ備へた――それが天才のある男子にも一寸見當らない程に――一つの手紙があつて、いたく私を驚かした。その手紙にはたゞ發信者の名前の頭文字だけ書いてあつた。私はその返事のなかに、私はたびたび露西亞の青年間で貴女のやうな熱情と勢力のある人を發見したことがあると云ふやうな意味を書き添へておいた。すると、先方からの返事が、また私を驚嘆させた。「貴君か私の國の若者のなかに仰せのやうな性質のあることを熟知されて居るのは御尤なことゝ思ひます。但しそれは私の場合とは違ひます、なぜなら私は數年前から祖母になりました」。

それから私はその女と猶手紙のやりとりを續けて居たが、數年後、他の同樣な書信とともに斷たれて了つた。そろ〳〵發信者に疑がかゝつて來たからで。と云ふのはその頃私の著した二三の書物が露西亞で禁止された。初めのうちは先方か

ら出す手紙に私の宛名を變へて、配達人に注意を與へておくやうなこともしたが暗殺の頻々と企てられる頃から總ての通信が止められて了つた』と。

例の露西亞流の方法で社會改造に狂奔する連中のなかには生若い少年が尠くない。なぜなら、たとへ老年になるまで青春の元氣を維持する者もないではないが露西亞でも、矢張他の國と同じやうに年功と經驗が、何うしても青年の眼に映つたよりは社會の現狀をより、強く見せるやうになり、從て之を打破る事も難かしく思はせるやうになるからである。廿年この方罰せられた者の中で三十歳以上の者は殆ど無い。二十五歳以上の者もまづ稀である。十七歳位から二十三歳位の者が一番多かつた。

一八八七年の春に、聖彼得堡で十六になる若い娘が囚はれた。彼女の兩親は上流社會で名高い人達であつた。父の高貴な位置にも關らず、彼女は至極自由に放つて置かれた。そのくせ警察からは常に見張られてゐた。若い學生の一團が

毎週彼女の母の家で集つた――沙翁の朗讀をすると云ふ名義で。ところが恁樣に六七人の學生が規則正しく集會すると云ふことがそのすぢの嫌疑をうけて注意された。彼等がその理由を說明すると、警察の答は恁うであつた。『兎に角左樣な朗讀會は廢めた方がよからう。』

彼等は表向その說諭に從つた。ところが、學生等は捕縛された。一人の學生の室から社會主義に關する論文の一小冊子の寫が出た。それからその論文の寫と同じ筆蹟の招待狀が發見されて、これには件の娘の花押がしてあつた。彼女がこの小冊子の論旨に全く關係がないと云ふ辯明は通らなかつた。

彼女は並々の女と異つてゐた。容貌は引立たない方であつたが、美しい眼を持つてゐた。彼女と心安立になるには中々六ヶ敷かつた。些としたことでも彼女はすぐ嗤つて了ふからである。撒慢な社交界の婦人や美しい男たらしの前では、彼女は決して口を開かなかつた。恁やうな種類の女の前で物を言ふことは到底不可

能だと頑張つて居た。彼女は青年のあらゆる嚴肅を持してゐた。彼女の唯一の德は忍耐であつた。そして、彼女は青春の純白な信仰を以て、いかなる種類の宣傳の效能をも信じてゐた。彼女の母は、三十五歲の貴女で、露西亞の血族のあらゆる傲奢な氣質を持つた、權式高い、情熱的な女であつた。然るに、その娘の情緒生活は凡て理性生活に掩はれてゐた。彼女はその母を丁度年とつた子供のやうに取扱つてゐた。

それよりは尙つと珍らしいタイプがある。恁樣な女達の中には辛棒强く、氣强で、いかなる反抗をも物とも思はぬ者がゐる。ある若い細君で、シベリヤの町に流された女が、恁んな手紙を書いてゐる。

『親愛なる友人諸君――諸君は嘲ぞ私の身の上を氣づかつて居て下さるでせうが、私に取つては一生涯こんな幸福なことはありません。私に嫌氣の差しかゝつたいとしい夫と暫く別れてゐるのも愉快でなりません。然し、そんな些細なこと

はどちらでも可いのです。私はこの町の囚人として扱はれませんで、女王のやうに歎待されてゐます。町中のものが、みんな流罪人か、その子孫か、若くはそのお友達です。みんなが私に親切――いや忠義――を盡すので競爭して呉ます。どんな晩でも、私は舞踏會へ行かないことはありません。そして舞踏室を離れたことがありません。此處はほんとに舞踏の天國ですよ』云々。

かやうな豪放の側よりも、最つと純スラブ氣質の謙遜深く、限りない溫厚の例の方が多い。莫斯科の場末で、庭のある小さい家に、非常に華車な生れつきの若い娘があつた。彼女は永い間重い病氣を煩つてゐた。その爲め、何かに激した時なぞは、口がきけないことが度々あつた。彼女は純粹な智的生活を送つて居た。全く精神上の事業にばかり耽つた。蒲柳の質のために、女の資格がなかつた。然し、いやが上にも强い純潔な智力上の熱心とその方面に就ての努力とが、屢々現はれた。彼女は澤山の外國の書物を翻譯し、自分でも書いた。彼女の勢力と最も

深い謙遜との結合は對話者を驚かした。彼女の父は名高い數學者であつた。彼女と、生々した健康な二人の妹とは、孤兒となつてからも他人の補助を藉らずに、互に支へ合つた。二人の妹、特に若い方の妹が、才ある病人の姉を敬ふ有樣は側のみる眼にも美しかつた。

しばらく聖ベテルスブルグにゐた有名な外國人と、ある晩、私は一座したことがあつた。その人が、頂度今私の話したやうな女と同じ精神上の傾向をもち同じ程度の教育の有る他の若い娘の話をした。彼女は僅か十七歳であつたが、性質は遙かに宏かつた。『私が其娘と交際つたのは極く短い間でした』恁うその人が言つて聞かせた。『私達は速ぐ別れて了ひました。その時、私はたゞ容貌の好い、利發さうな眼付をした、親切なそれでゐて擧動の至つては、き〳〵した娘だとだけ思つてゐました。それだのに、いざ別れると云ふ前の日に、私はその娘から次のやうな面白い長い手紙を貰つたのです。

「この場合は頂度好い機會だと思ひますから、失禮ですが私の思つてゐる事を、少し言はして下さい。これは私一人の申すことではありません。まだ貴下が能く御存知ない露西亞の青年の大部分に代つて申上げるのです。一昨日D――家でお會ひ申したとき、お話するつもりでしたが、わづかに數分間ではとても盡きないので止めました。貴下は若い人達と知合になることが比較的少なかつたと惜しまれましたが、それは貴下の御滯在の時期が頂度惡かつたからです。何の公立學校も唯今試驗中です。然かし、そんな事情が全く無いにしても、露西亞の青年達は貴下と充分知合になるわけにまゐりません。私しどもは人生の最高善――自由とそれから離れがたき凡ての幸福とを奪られてゐます。然かし、人生に重要な價値とを賦へる其のたゞ一つのものに私どもが冷淡だと御思召されては困ります。もしも運命が私共にほんの僅かでも幸福を送つて呉ますなら、私共は貰つた凡てのものを人一倍に愛します。また人一倍に尊重します。私共は何よりも解放的な科

學を喜びます。露西亞の青年には自分達の感じたことを筆に現はすことさへ許されてゐません。然し、それが爲に貴下が眞の事情が御わかりにならないで、私どもに就て不當な印象を懷かれる樣では、私は愛國者として默つてゐられません。貴下は嘗てルディインは露西亞人の無氣力な性質の代表者だと申されました。それを承つたとき、『無氣力！』と恁う私は嘆息いたしました。否へ違ひます。露西亞文學はたゝ露西亞國民の生活と性格との不完全な反照だと云ふ事を記憶えてゐて頂きたい。よしんば彼のやうな者が私どもを啞にし聾にしやうとも、私共はそんなことに敗けない少數者であると云ふ事を忘れないで頂きたい。兎に角、私共は實際にルーディインのやうではありません。ルーディインは賢しこい、多少は物のわかる男でありましたが、然し精神の薄べらな男でした。彼は何人をも何物をも愛しませんでした。彼は美しい理想に魅されてゐました。然し同胞に對する誠の熱心な愛に牽かされたことはありません。彼がナタリヤに對する戀の破れたのも、

殊に人生に失敗して英雄になり損つたのも、全くその爲めです。然し、神に誓ひます——決して私共を人世の物憂き戰に對する失敗者だと思つて下さいますな。全くそれは寃罪です。他日必ず露西亞が其政治上の痼疾から救はれて、自由に男らしく現はれる日があると私は確く信じてゐます。私は露西亞の國民を信ずるばかりでなく、我々の敎育ある青年を信じ、眞なるが故に美なるあらゆる物に對する彼等の受容性を信じます。それは私共が事物の意義を闡明し、我々により廣き眼界を開いてくれる人々には深い尊敬を拂つてゐるのでもお判りになりませう」。

勿論この手紙の中には普通はづれた才氣が現てゐるわけではない。生若い十七歳の娘の子が見えるやうだ。しかし、それにも關らず、代表的な露西亞氣質が在る。他の國の同じ年頃の娘達には一寸見當らないやうな。それから、鋼鐵の刄のやうに閃めく意志、末頼母しい意志がその中にある。

恁樣な進歩的青年男女に就ての明らかな概念をうる爲めには、彼等が活動の方

面に立つて、その熱心な教化の目的物としてゐる普通の平民と面と對つてゐる時を觀なければならない。

是等の青年はその時代の最も教育ある人達である。然るに農民の中には非常な無智が蹂つてゐて、兩者の間は談話も通じないやうな有樣でゐる。嘗つて西刺利亞から歸つた數學者――實際的な一青年――が私に次のやうな話をした。彼が澤山の書物を持つてゐた爲めに、その田舍町では、彼の事を神通力を具へた人のやうに思つてゐた。ある春のこと、彼がその土地の百性に菓樹の接木の方法を敎えてやつたら、翌日近在の者達が總出で病氣のある小供や牛を連れて來て療治を賴んだ。『何卒治して遣つて下さい、若い親翁さん、何卒治して下さい。』で、彼が自分は療治の方法を知らないと云ふことを何程話しても、誰一人信ぜなんた。百性達は嘆願し、哀訴し、そして彼が左樣に自分達を助けて呉れないのは何か彼の意に逆つたのではあるまいかと訊いた。『若し貴下が爲さらうと思へば必然能きま

す』恁う言つた。

ベンジャミン、コンスタントの著した古い書物『宗敎』の中に恁んな話がある。十九世紀の初め頃、露西亞の一將軍が正裝してシベリヤの辟遠な一村落に乘入つたことがある。彼はその土地の住民から『神』それ自身だと思はれてゐた。それで彼の臨御の記憶は確くその地方人間に殘つてゐて、十年後に露西亞の一佐官が再びその土地に臨んだとき、彼は神の子として歡迎された。

斯樣なことは今日では在りえない事だ。然かしこんなことがあつた。一人の敎育ある露西亞人が小露西亞の克薩人の住んで居る一村落を通つたことがある。その時彼は恁んなことを訊かれた。『萬望、聞かして下さい、貴下は他界へ行らしたことがありますか。』で、彼は氣持を惡くした。なぜなら、住民は彼の話を信ぜないで、彼を揶揄てゐると思つたからで。然るに事實は恁うであつた。先頃その村の一人が巡禮から歸つて來た。その者の話に、彼は冥土へ寄つて近頃死んだ村の

人達に遇つた所、その人達から親戚への傳言を頼まれて來たと言ひふらした。で、輕卒な克薩達から田舍土産を澤山あづかつて、その人達の死んだ親戚の者を見舞ふのだと云つて再び冥土へ立つて行つた。で、村の人達はその見舞物が確かに先方へ屆いたか否かを露西亞の客人から訊きたかつたのである。

かやうな無智と純朴を對手にして、敎育ある者が農民とお互に知り合ふと云ふのは困難だ。——それでゐて、對手は敎師が生徒を扱ふやうに取扱はれるのを好まないから猶更難義だ。從て彼等は道德を說かれることを喜ばない。先頃、酒の害を諷したトルストイの新戲曲がある州で試演されたのだが、その中に惡魔が酒を造つて自ら配る所のあるのを觀て、百性達は厭な顏をした。小供のお伽話ぢやないかと彼等は言つた。

その同じ百性がまた容易く恁んな事を信じる。今年豐年でないのは、寺の坊さんが確つた給金を取るやうになつたからだと。で、坊さんの方では百性の收獲の

多いやうに、敎會費のどつさり集まるやうにと思つて、熱心に大供養をしてみたが、次の年も矢張凶年だつた。そこで百性達は祈禱は惰ける、旱魃は猶續くと云ふ風だ。そのまた同じ百性が露土戰爭を說明して斯う言つた。土其古の邦の地の中に年老つた馬鹿に大きな獸物がねてゐて、その左の後趾の瓜の下に無限の金の寶物が横はつてゐる。皇帝がそれを欲しがつて土其古から奪ろうとしたのだと。

一寸斷つて置くが、露土戰爭から歸つて來た兵士の百人の中で七十六人までは全く讀み書きの能きない者ばかりだつた。

それに引換へ、この邦の敎育ある人士のあらゆる努力を支配する道德的觀念を見るがよい。それは、他人の爲めになるやうに、自分の周圍の人達に自由の得られるやうにと言ふのである。この觀念は色々な服裝で現はれる。或時はベンザムやミルの功利說の正服で、ある時はチエルヌイシエフスキーの社會主義者の服で、また或時はドストイエフスキーの短衣で。然かし何れにしてもこの觀念は露西亞

父國の名譽なる改革家及び彼等が友の人世觀の基礎である。

兩性の關係に就ては、彼等は特に男權女權の平等を主張し、人生の享受しうべき自由の最大量を何れの性にも許さうとした。この點を其邦の農民の間に行はれてゐる思想や行爲と比較して見やう。彼等の間には早婚が行はれて、普通には男が十八、女が十六で結婚する。その結果は斯うである。『老人』即ち家長と言はれて、無限の權力と尊敬せらるべき資格とを有つてゐる者も、時によると四十歳以下のことがある。で、昔からの習慣で、若者は皆な野良へ追ひ遣られて、家長ひとりが彼等の妻と一緒に家の留守をすることになつてゐる。丁度土耳古のサルタンのやうに、彼は若い妻君達を自分勝手に自由にしても、誰一人拒むことが能きない。露西亞の俗謠の殆んど凡てがこの蛮父の暴力を怨む聲である。その結果として露西亞の百性は女を自分と同等な者だとは決して思つてゐない。諺にも斯う言つてある。『お前の嬶をお前の魂のやうに可愛がれ、そうしてお前の毛皮のやうに打て』

――『自分の嬶が打てないやうで、何が打てる』――『俺の嬶だ――俺の物だ』。で、十七世紀になつてからでも、娘を嫁に遣る時、その父親は新しい一本の鞭を買つて來て、その鞭で先づ最後の自分の戒めを娘に與へたあとで、嚴い顏をし乍ら婿に向つて、遠慮なしに早速これを使つて呉れろと云つて渡したものだ。それから、婚禮の晩には、婿殿が嫁の肩を一つ二つ鞭で打つて置いて、『今日からお前の父親の意見を忘れて、俺の意見に從へ』と遣るのだ。でも民謠には『絹の鞭』を使へと敎えてある。

今これを、この邦の新時代の青年の自由な女權に對する思想、民衆の自由と幸福の爲めに兩性相携へて働くと云ふやうな思想に較べたとき、何たる懸絶であらう。

然かし是等の敏捷で快活な青年と、彼等がその爲にまたその間で働かねばならない人民との間の懸絶は如何に甚しからうとも、それは獨自の道德生活を營

む『インテリヂエンチヤ』と、全露西亞の行政權と物質上の所有權を掌握する官僚生活との間の懸隔ほどにははげしくない。

この邦の知識上の撰良にとつては、倫理學の原則は官僚社界特有の道德でもなければ、なほ合法な道德でもない。――なぜなら『一擧一動規矩に準ずる』などと云ふ格言はこれ等の者から見れば寧ろ俗人の符調であるからだ――彼等が行爲の標準は何よりも先づ彼等自身『聖い火花』と稱ぶ所のものであり――この火花をドストイエフスキーは罪人や半狂人のなかにさへ見つけ出した――また彼等の道德は彼等の所謂『無意識狀態』であるのだ。――即ち人が努力なく克己なく、おのづから其性に隨つて善を爲すのを謂ふのである。

露西亞のやうに治められ統べられる邦の中に――其處では基督敎の信仰の暗いどん底で、最も無智な頑迷が法律となり習慣となりして、宮廷から下々まで擴がり、一人の意志が即ち無上有力の意志であるやうな邦の中に――恁樣な道德上の

主張をもつ『インテリヂエンチヤ』のゐることを想像してみるがよい。

是等の二つの主力が何の方面でも互に相背いて進んでゐる。何んな處で落着くであらうか？　誰が是等の力の平行四邊形を引いて、其合力なり方向なりを示すことが能きやう。

恁う考へて來ると、ゴーゴルの『死んだ魂』の中の一節を思ひ起す。チチコフの「キビトカ」Kibitka が矢鱈無精に驅け出して、遙か彼方へ消え去つた所の條に――

『然り、爾露西亞もまた「トロイカ」troika のやうに止度なく驅け出したのではないか。爾の後には砂煙が立ち、橋が軋る。爾は何もかも飛び越えて進んで行く。路傍の人は驚いて、立停つて恁う曰ふ。「あれは電火ぢやないか。何だあの血の凝つたやうな火の玉は。恐ろしい魔力を持つた馬だ。あれは何う云ふ種類の馬だらうか。全で兩肩に旋風をもつてゐるやうだ。あの馬は天の御告を聞いて、神樣に

乘り移られたやうに、蹄を大地から離したまま鐵のやうな四肢で空を驅けて昂つて行くのじやないか。露西亞よ、爾は何處までかけつて行くのだ。」けれども答はなくて、只馬に附いてゐる小さな鈴が奇妙な音を立てるばかりだ。空にはうなりが聞えて、それが嵐のやうに次第に高まつて來る。露西亞は益々その荒々しい飛行を續ける。すると、地球上の他の國民や帝國は驚いて側へ寄つて途を明ける。」

五、

一八八七年の春、老詩人ポロンスキーが初めて詩壇に現はれてから五十年目の祝賀會が、聖彼得堡で擧行された。此の祭典で私はその邦の官吏社會を瞥見する好機會を得たばかりでなく、露西亞の文學界や美術界に於ける諸名士と知合になることができた。

ヤコブ、ペトロヴキッチ、ポロンスキー（一八二〇）は現に非常に尊敬されてゐて、叙情詩人としては比類ないほどの評判をとつてゐる。彼とメイコフとプレチエーエフとは、過去の露西亞に生存する一流の叙情詩人である。最後のプレチエーエフ（一八二五）はドストイエフスキーなどと一緒に一八四九年に死刑の宣告を受けた『ペトラシエフスキー黨』に屬してゐたが、減刑に遇ひ、烏拉兒に謫

送せられて、オレンベルヒ砲兵隊に投せられた。その後一八五七年に漸く相續襲爵の權利を與へられ、首都に歸還する事を許された。今日まで彼は聖彼得堡に於ける自由派に屬してゐる。是に反しプロンスキーとメイコフは政府と密接な關係を有つてゐる。と言つて何も彼等が、いつも政治に嘴を入れるとか、自由に反した主義を奉じて居るとか謂ふ譯では無い。唯二人とも資産と言ふほどの資産を有つてゐなかつた。で、露西亞でも叙情詩人として生活する困難は、他の一層小さい邦々に於けると異らない。時々小説を書く位では追附かない。そこで政府は彼等の生活を補助する爲めに、檢閲官の職を與へてゐた。叙情詩人と文學檢閲官の兼帶などは隨分悲劇的喜劇だ。そこらが全く露西亞獨特の事象だ。何れの邦へ往つても、若し絶對の自由を要求する者があるとすれば先づ叙情詩人であらう。それから亦他人の自由を阻害するに不適當な者があるとすれば矢張叙情詩人であらう。

兎に角意志と生活の弱點が一緒になつて、彼等をして政府の賜物を感謝して拜領させるやうになつた。

ポロンスキーは檢閲官で政府の官吏であつた。彼の祝賀會を援助する爲めに全らゆる官界の人が列席したことは當然豫想されるであらう。彼はまた軟文學の代表者として尊敬されてゐた。それ故聖彼得堡の多數の文學者の集つたとも事實だ。たゞこの會合に參加しなかつた者は、某々の二評論に陣取つてゐた、極端な自由派斗りであつた。また出席してゐた眞の自由派文士が御客樣として――或者は名譽の賓客の格で――彼等の著作の刊行を禁じ、その講演を阻害した人々の間に列座してゐたのは餘程滑稽であつた。

ポロンスキーの側には、藏相ビシユネグラドスキーが落付拂つて座つた。大臣は見るから端麗な、中年の、肩幅の廣い人であつた。が、どうも人の信用をうるやうな面相でない。現職に就く前にも多少の批難を受けたことがあつた。何所の

邦でも同じ事だが、兎角光る物には泥を投げたがる。そこで彌治馬連がいろんな根も葉もない馬鹿げた噂を流布して世間に行渡らした。彼が大藏大臣に任命されたとき、カザンの教會へ連れられて往つて、寶玉で飾つた有名な聖像の目前で、國家の財寶は神聖犯すべからざるものであると云ふ嚴かな誓言を立てさせられた。所が、不思議にもその式の終つた跡で、二三の金剛石と紅玉が聖像の衣裝から紛出してゐたと云ふのである。此話は丁度露西亞の民謠にある筋と同じやうに馬鹿げたものだ。例へば、哥薩克の酋長プラトフが、身を商人に變して巴里に奈翁皇帝を訪ね、實は俺はかう〳〵云ふ者だとその佛蘭西人の前で名乘を擧げるが早いか、ひらりと馬に飛乘つて皇帝の鼻先をかすめて逃出したと云ふ話もある。然かし、前の話は露西亞の官吏が斷えず公金を私する風習が人民の間に起した猜疑心を能く説明してゐる。ある外國の記者が、波蘭に於ける露西亞の狀態を説明して、一つの道路を造るに八萬留が支出されると、其内四萬留は官吏の衣嚢

に這入らねば治らぬと云ふ話をすると、聖彼得堡の人達は言合はしたやうに恁う云ふ答をした。若しそれが事實なら波蘭人は幸福な奴達だ。此處では八萬留の道路費が支出されると、その八萬留が悉く官吏の衣嚢に這入るのだ』と。

地方議會がその法治權を失つてから、御かまひなしに、飽くまで露骨に、窃盗が行はれてゐる。で、官吏社界の不秩序が許されてゐることは昔よりも今の方が餘程酷いと人民は思つてゐる。

藏相ビシユネグラドスキーの傍に一人の文學愛顧者が坐つてゐた。――それは正裝した將軍で、海老のやうな眞紅な顔に、錦手の陶器のやうな眼付をしてゐた。そして自國や外國の間違のない種類の叙情詩や小説を擧げて好意を表してゐた。

馬蹄形に並べられた卓子の左側の眞中に座を占めたポロンスキーは如何にも穏やかな、聰明な顔に長白い髯を垂れた、脊の高い威嚴のある老紳士であつた。頭髪は滑らかに後ろへ梳られて居たが、未だ墨色を保つてゐた。手には杖を携へて

ゐた。彼は少し跛であつたのだ。で、身に餘る祝賀を受ける滿足に對し、初めは
やゝ不安の顏付をしてゐたが、人々の自分に捧げてくれる尊敬に馴れるにつれ
て、存分な喜悅の色が其のそはゝ〳〵した態度を通して窺はれた。彼の性格には何
處となく小供らしい所があつた。で、いろ〳〵の優れた特質を現はしてゐた。ツ
ルゲーネフが絕えず彼を尊敬して、その友情を結けてゐたのは尤な次第で、彼に
とつても名譽なことである。(和蘭のトール、ランゲが出版した集中には、ツルゲ
ーネフからボロンスキーに宛てた眞情の籠つた手紙が幾つか載つてゐる)。

ボロンスキーと相對した卓子には彼と兄弟分の詩宗兼檢閲官のニコライヴキツ
チ、メイコフが、當日の演說の草稿を脇下に挿んで座つてゐた。頂度獨逸の敎授
連がよくやつてゐるやうな長い白髮を後ろに垂れて、奇麗な壯健な橫顏を見せて
ゐた。彼は先づ立つて、卓子から少し離れて、草稿を朗讀し始めた——他の邦の
習慣となつてゐるやうに、集つた人々の方に向直らずに、當日の名譽の客に向

て朗讀した。その爲め彼の言葉を能く聞き取るには勢ひその周圍に一團となつて
集らねばならなんだ。彼が此の賀宴を祝する爲めに、皇帝が檢閲官としてのボロ
ンスキーの給料を特に倍額に增したことを報告すると、四方から盛んな喝采が起
つた。すると亦、何とも言ひやうのない恐れ入つたやうな聲で、『讃美歌！讃美歌
！』と云ふ叫が起つた。それは國歌を指してゐるのだ。そこで彼等は皆起立して
謠つた。次には祝電が朗讀される。愈々カトコフの番になると、拍手と喝采とで
場内は割れるやうであつた。が、一隅にはより、無意義ならざる沈默があつた。斯
樣に壓制と保守との權化とも見るべき人物に對する滿足の叫聲を聞くと云ふの
は、要するにこの邦に於て、人の口を塞ぎ、その神經を麻痺せしめ、斯くて自ら
高しとするあるゆる者の粹を此の會場に集めたことを意味するのである。たとへ
其中には立派な敎育のある人々が雜つてゐたにしても。

カトコフの名がかやうな喝采の嵐を牽起した中で、ひとりその頭を振り、不思

議さうに隣客を眺めてゐた者に、有名な純露主義の歴史家オレステス、ミラーがゐた。小柄な、班白の男で、物に激したやうな顔付の中には情熱の表情と教授らしい落付とが雜つてゐた。一方にはあらゆる露西亞の著作をその國民の獨創物だと信じてゐるアクザコフ派と、他方には西歐の學風を奉じてゐる學者――例へばスタゾフなどは露西亞の民謠に關して、其起源を遠く古代の諸民族間に播ろがつてゐた傳說に索めた――との間に立て、彼は折衷說を唱へた。彼は嘗てキエフに據て立た偉大な國民的英雄ムロムのイリアに就て重要な論文を書いてゐる。一層近代の文學ではドストキエフスキーが彼の理想である。頂度その時も彼の隣客に對て、この文豪の作『カラマゾフ兄弟』の優れた點を說明してゐた所を、カトコフに向けられた喝采の爲めに遮られたのだ。彼は一年過たないうちに聖彼得堡大學に於ける教授の職を奪はれることを自信してゐた。なぜなら、彼はその緒論的講義に於て二回も續けて、カトコフ流の保守主義が國家に及ぼす害毒を說明したからである。――カトコフが死んだ時、皇帝自身で其未亡人に書を寄せて、彼を露西亞の最大なる愛國者と推稱したのを見ても、そんなことは判りきつてゐやう。

ミラーのすぐ側に一人の若い男が座つてゐた。名はプセボロッド、ガルシン。人を人とも思はない、荒々しい自由の鳥である。たゞ文學に對する愛着の念が彼を此席に導いた。見るから嚴丈な、黑い頭髪をした、苦勞を積んで來たと云ふことの分る男であつた。彼は物凄いほど注意深い野性的な瞳をギョロ〳〵させてゐた。彼は生涯に幾分か狂的鬱憂に襲はれた。さま〴〵の恐怖が彼の未來にも懸つてゐた。カトコフに對する歡迎が彼ほどには深い印象を何人にも與へなかつた。然かし、數月後にカトコフが死んだ時、殆んど凡ての露西亞の新聞紙が採つた卑しむべき態度が、彼の意識を奪ふ原因とならうとは、誰に想像がつかう。露西亞の新時代に於ける凡ての邪惡の根蔕であるとまで彼が思ひ込んだ其人に對する雨

のやうな頌讃の辭は、彼の頭腦に一大打擊を與へた。『否や〳〵、わが國の新聞紙が恁うまで下劣であらうとは俺は信ぜなんだ――何うしたら可からう、果してさうなら何うしたら可からう』恁う言つて、彼はその後半年間、暗の沈鬱のうちに座つた。そして泣き通した。人に聞かれると『たゞ俺は露西亞の爲めに泣くのだ』とばかり答へた。彼が雇はれてゐた鐵道會社の重役等は、如何かして彼の回復を計らうとして、休暇と旅費とを遣つて南方へ旅立たせやうとしたが、頂度出立の前日、彼はそのうち若い妻と一緒に住つてゐた家の二階から落ちて自殺した。

ボロンスキーには一面識もない人だが、頂度居合せたので、すゝめられて、メイコフの後で演壇に立つた者がある。至極平凡な演説であつたが、それでも熱心に喝采された。この國で雄辯家になるには左程困難な事でない。その筈だ。露西亞では、辯護士を除けば、誰と云つて演説の才を有してゐる者もなければ、遣つて見やうと云ふ勇氣の者もない。それから、演壇に立つ時は必然草稿を手に持つて

ゐて朗讀する。辯護士仲間にも能辯で有名な人と云つては稀である。この道にかけてまづ露西亞で有名なのは『大辯護士』の稱あるアレクサンダー、バソーベルトに、ウルソフ公爵、コニ、それからウチン位なものだ。然し面白いことには演説家で一番人氣があつて收入の多いのは波蘭人のスバゾウイッチだ。露西亞本土と同じやうに露西亞波蘭でも、能辯の自然學校とも謂ふべき公共及政治生活は一切禁じられてゐるが、然かし波蘭人は露西亞の外で三個國の國會に這入ることが能きる。で、彼等の天賦は昔から其詞を重んずる方に向つて來た。誰も波蘭人ヨモフ、コスシエルスキーほどの雄辯を聽いたことはあるまい。彼は普魯士上院の一員で、また獨逸國會の議員である。

その他にボロンスキーの祝賀會に列席した人達のうちで他國人の知りたいと思ふ者に老詩人プレシエーエフがある。體格の確乎した、頭も鬚も眞白な老人であつた。この人は露西亞の老人仲間では珍らしく、その青年時代からの信念を忠實

に守つて來た人だ。そのほかにドストイエフスキーの未亡人がゐた。四十代の年輩の整乎とした優美な婦人であつた。もしあの不格構で疎野で何所までも好人物らしい夫の傍にゐたら一入際立て見えたであらう。彼は不愉快な夫であつたに相違ない。一般に言ふ詩人らしくなかつたよりも、家庭的の人として猶更不吊合であつた。彼の性行の不秩序なことは、頂度彼の著作が神秘宗教と歌虔な隱者教の議論の連續であることに思及ばぬ讀者の頭腦のやうであつた。

その後幾許もなく、五十年祭好きの露西亞で、演說やら祝電やらで、老海洋畫家アイバゾブスキーの爲めに同じやうな祝賀會が開かれた。『彼は露西亞の藝術を今日の位置に上げた』恁う言て感謝されてゐる。彼の名聲の原因は恁うである。露西亞人で海に詳しい者は至て尠ない。海を視たことのない者すら珍らしくない。で、彼の畫の前で批評や判斷の能きる者が無かつたのだ。彼も若い時代には立派な畫を描いたであらうが、老年になつてからは唯それを反覆したに過ぎなかつた。頂度菓子屋がワッフルを造るやうに海の畫を造つた——即座に溫かく新しいのを。何時も同じやうな物語のもので、何時も同じやうな波が、右からか左からか、日光でなければ月の光のなかに見へる。數年前コーペンハーゲンで開いた彼の繪畫展覽會が大失錯に了つたのも相當な理由のあることだ。

この祝賀會から二三日過て、アイバゾブスキーは百五十人のお客の爲めに返禮の宴を張つた。その中には學士會員の全部、文部大臣、宗務院總長、皇帝の侍講ポビエドノスチエフなどがゐた。客は銘々にアイバゾブスキーの寫眞を頒たれた。それは大きな寫眞で、畫布の前に座つてゐる彼を現はしたものである。その畫布は四分の一半折で、自分の手で描いた。恁うして彼はお客に百五十枚の小畫を分配した——浪、難破船、海の月などの。大學の校長が長い馬鹿げきつた演說をした。彼は恁う曰つた。黑海はよし消滅する時があつても（涸くと云ふ意味だらうか？）、その記臆は決して消え去ることがない。それはアイバゾブスキーの畫

によつて不窮にされたからと。この席に列つてゐた新聞の代表者はノーウオ、ウレミヤの主筆スポリン一人であつた。なぜなら、他の新聞紙はアイバンブスキーをいかなる階級の美術家としても認めることが能きなかつたからである。

一般に露西亞の官吏社會が他國に比して劣つてゐるわけではない。盲從、卑屈な御氣謙取り、それでゐて世の中へは傲慢な長官面をするのが何處でもの習慣だ。たゞこの國の官吏は修養の不足と性來の愚直にかて、加へて、上級者の威權が無限に大きい爲めに、一層憐むべき情態にゐるのである。

誰も知つてゐる如く、露西亞は幾多の州縣に分たれてゐる。露西亞本土が五十州波蘭が十州。それから、國境では三四五の州が各自一人の總督の下に置かれてある。更に聖彼得堡とか莫斯科とかカールコフとかオデッサとか云ふ大都會には總督があつて兵權をも掌握してゐる。一八六一年の農奴解放までは知事が其州の全權を握つてゐた——百五十萬の人民の上に立つ小皇帝であつた。その後は唯

だ雜種の委員が知事の周圍をかこんでゐると云ふだけ狀態が變つて來た。けれども是等の行政機關は何等の重味もないものであつた。委員と云ふ委員は皆知事の下に使はれてゐる官吏か、さうでなければ官吏的屈辱を生涯の座右銘としてゐる極く下役の者から成立てゐたからである。彼等は少しも知事の權力を縮少せなんだばかりか、其責任を分擔することをも忘れて、却て無責任にした。ザルチコフの『長袖連』と云ふ作に於ける、地方知事の殘酷な說明を讀むだけでも、彼等の敎育程度や、何日何時どんな事が起るだらうと云ふやうなことが能く分る。

猶加へて置かねばならぬことは、一八六四年の法治上の改革後にも、知事は內務大臣に報告して『公衆の安寧の爲めに』彼の欲する人物を行政手續に據り流刑に處することを願ふ權利を保有してゐる。然かしこの特權は知事ばかりには限られてゐない。『陛下の秘密司法局第三課』が設けられて以來、官吏や其下級者を監督する秘密探偵は、判決も證據もなしに、何人でも疑はしい者は遠慮なく獄に繫

なぎ、または流刑に處することが能きる。一方では國家の機關を代表して他人を其車輪の下に置くことが能き、他方には自分自ら同じ運命に懸らぬやうに常住苦心してゐる人間が、恁樣な制度のもとで、人性の奥に隱れてゐる罪惡と卑屈心を表面に露はさずに濟すことが何うして能きやう。

露西亞の高級官吏の中には、判斷力があり人情深い所から、または強い正義の觀念をもち儀禮に關はない所から、最も困難な位置に立ちながら人民の尊敬を受けてゐるものがある。彼の有名なワルソーの知事などがさうである。然かしまた一方には波蘭總督グルコ將軍のやうな全然無能な者があり、莫斯科總督ドルゴルコフ公爵のやうに其位置を惡用する者がある。彼は外國人に對しては至て腰の低い丁寧な老紳士だが、淺墓な、虚榮心の強い相を備へてゐる。で、諸多の人民の福利も慘苦も偏に彼の感情と判斷に懸つてゐることを思ふと、その相が一種の苦痛な印象を人に與へる。公爵が市の富有な保主主義の商人間にどれだけ好い友を

持つてゐるかは、その家の控室に列べてある贈物を見れば分る。――それは彼の五十年祝賀式の折に贈られた高價な寄贈品を集めたもので――許多の大きな箱を滿してゐる。若し手練と寛忍の必要な場合には、彼の公務上の熱心もそつち除けになつて了ふ。

一八八七年の秋に一事件が起つた。莫斯科大學で奏演會が催されて、學生の管絃合奏があつた。森とした奏樂の最中に、忽ち二つばかり横面を撲る音が聞えた。一學生が探偵ブリスガロフに喰はしたのだ。――この探偵はある教授が『横着な駱駝』と渾名を附けたほどの男で、學生の怨を買ふためにあらゆる手段を弄したカトコフの手足であつた。撲ぐると直ぐに『全學生の御見舞だぞ』と云ふ聲が起る。場内は一齊に動搖めき渡つた。巡査も哥薩克兵も、すべて校外に遁げ出す學生を喰止める爲めに召集された。一般の鬪爭が起つた。縛られまいとして抵抗した結果、校庭で撲られ、負傷した學生も尠くなかつた。

此の事件は官憲に取つて、大學の青年を取締るに一層嚴重な手段を執る宜い口實になつた。八十六人と云ふ多數の學生はその爲めにドルゴルコフに依て流刑に處せられた。恁樣な廓清の跡に殘された人物は極端な保守主義者ばかりであつた。政府よりも一層の專政主義者で、心から農奴解放を悲しみ、政治問題に關しては、時と場合によつて純露主義か大露西亞主義を調劑する亞流であつた。

六

どこの國へ行つても、他國人が一番に識りたいと思ふのは官吏社會ではない。ある大都會に這入つて先づ彼の索むる所は、市民自らが其精粹と見做してゐる人士に紹介されたいと云ふことである。支那人の飲む茶と他國で嗜くものとの間には大變な相違がある。茶好きの人が支那へ行つたら、必然土人の愛飲する茶を索めるであらう。

他國の者が先づある地方のスラブ人種を識り、次に他の地方へ遣つて來たとすると、其の新しい人種を遺憾なく理解するには、先に識つてゐる人種を比較の標準とせねばならないことに氣が付く。斯うしてこそ初めて類似點が發見されるのだ。さもなかつたら比較は全く無意味に了つて仕舞ふ。ワルソウの教育ある貴族

社會と比較して、初めて聖彼得堡や莫斯科の最も進歩した趣味ある人々の特性が微細な點まで窺はれる。一體、露西亞人にはスカンヂナビヤ人や獨逸人と共通な性質が非常に尠ない。同じ統治のものに同じ國語を使つてゐる芬蘭人にさへ似てゐない。こゝに芬蘭人と露西亞人の態度を巧に説明した譬がある。一方が、正直で穏やかで、賢こいながらに單調な稍疲れ氣味の生活を送つてゐる商人とすれば他方は突飛な書生——放埒をした後で食ふものもなくなり、どんな馬鹿でもやり兼ねないばかりか商賈へも手を出す、借金を拂ふ工面をするより人生問題を考へると云つたやうな突飛な書生に似てゐる。芬蘭の首府はその國語の相違や之に附纏ふ色々の事情があるにも關らず、素通りの旅客にスカンヂナビヤ的印象を與へる。で、この國はスカンヂナビヤ半島よりも世界の强國に密接してゐる關係などから、高等教育ある人士の間には宏い自由な世界的素養のあるのは事實だが、一面には矢張北方的な輕薄、忤獰、俗惡な所がある。要するに芬蘭には露西亞と比較すべき眞の標的となるものは一つもない。

波蘭は全く之と異ふ。否や、類似の點が餘り際立つてゐるので、初めは此些末な相違點を掩つて、露西亞人獨特の性質を隱して了ふことがある。で、之を發見するには波蘭人と露西亞人に共通な諸點を除去して懸らねばならない。

斯樣にしたら什麼微細な特點を備へてゐる性質にも自然と接近することが能きる。否や、之等の特性なるものは側で觀るほど無意味なものではない。が、尋常の觀光者では歐羅巴諸國の中流以上の社界の間に別段な相違を認めないであらう。通る國々で、同じやうな服裝の人に逢ひ、同じ生活と禮儀の規準を見て歩るく旅客には、何處も違つた所はあるまい。偶々違例の點と思つて氣を留めた事も事實は偶發的の事が多い。之に反して、批評的の眼を持つてゐる者は、根本的と非根本的、標準的と偶發的の識別に慣れて、個人の性癖を國民的人種的の傾向の中にたどり、從て輕率な判斷を避くるやうになる。

ある人格、ある特性の者に遇ふたびに、先づ自問せなければならない。『これは露西亞以外にはないものであらうか』と。恁樣にして世界の稀族に共通な所を研べ、次でスラブ人種間に共通なものを研べる。それから各國の貴族や百姓に共通なものを研べて、最後に特に國民性に據るものの研究に移るのである。

第一に眼に付く特徴は疑もなく、露西亞人の主なる趣味が近代的であると云ふことである。然るにワルソウでは然うでない。是は波蘭では一の史的事實――未來に復活させたい過去の夢が――重要な市民の思想を喰つてゐるからである。露西亞では過去に屬することは些しも考へられてゐない。この國の『イリテリジエンチア』の間には見え透くほど歴史的觀念が薄い。一體、彼得大帝が左樣な思想を根こそぎ引倒さうとしてゐたのだ。露西亞で革命思想を抱く者の中に史的觀念を缺いてゐるのも、その帝國の近代の建設者が恁樣な現代的趨向――最も新しい物を手近な唯一のものとする――を創めたからである。この點から彼得大帝は所謂虚

無主義の父とも言ふことが能きる。純露主義者が彼を嫌ひ恐れる一つの理由は茲にある。

加之、露西亞の知識社界の者は、波蘭人のやうに異風な、敵意のある國民性から壓迫されないだけが仕合せだ。それからまた官吏社界――皇族間とすら意志の疎通がついてゐる。だから十九世紀の最初の十年間にあつたやうに彼等が國民性を離れるやうなことはない。

例へば若いジョージ、アレキサンダー大公は、カザリナ、ミケーロブナ王妃の子で、そして有名なヘレン后の孫だが、祖母の代からいろ〳〵と儀式ばつた中に育てられたにも關らず、時々は自由主義者の會合に顔を見せることさへある。身は皇族でゐ乍ら、先方はたゞの外國人であらうと、その人と知合になるのが利益だと思へば、自分からどし〳〵初對面の訪問を遣る。彼は宏ろい健全な依義を有つた青年で、趣味にも乏しくない。露西亞の軍隊中を尋ねてもこれ位開けた士官

は尠なからう。彼の母の聖彼得堡の宮殿は宏壯なことに於てコーペンハーゲンのクリスチアンボルグの宮を思はせる。彼女はまた露西亞の到る所で宏大な土地を所有でゐる。で、若い大公は能くその國を知り拔いてゐることが誰にも分る。彼は上品で、物靜かな、能く理の解つた人である。彼の擧動は獨逸流の剛健と露西亞流の智的自由を雜せた立派なものである。現代露西亞の上流社會を流れてゐる智的潮流が、半ば世界的で半ば國民的であると云ふ面白い例證は大公に見ることが能きる。

彼の祖父ミケール大公は其長兄ニコラスと一緒に、有名な瑞西人シキザアテ、ハルペに敎えられた。この人はその以前亞歷山第一世の敎師をした人である。で彼等は其學童時代に、十八世紀の自由思想の全課程を授けられた。是等の若い皇族連の受けた敎育が、何處まで基督敎の傳說に關らない自由なものであつたかはザートリツア、カザリナの爲めにデユロフが編修した記念錄を見ても分る。その中

に、基督敎の開祖に關してラ、ハルペの採つた說明が次のやうに出てゐる。『ジエサス、渾名は基督、猶太人にして、基督敎の名は之より出づ』と。然かし、若き皇族達は長たらしい敎師の哲學に倦んじ果てて、一方の耳から他の耳に通りぬけさした。そして練兵場に出ては大鼓を打たいたり、調練をするのを主な樂にしてゐた。多少數學的の才能を備へてゐたミケールは熱心な砲兵士官になつた。平和の藝術や科學よりも戰術の研究に耽つた。『朕は戰爭を惡む、そは軍隊を汚せばなり』とは彼の長兄の有名な詞であるが、彼も亦言ひさうな文句である。それは、觀兵式と調練と指揮と肩章とが彼の青年時代の凡てゞあつた。然るに長兄ニコラスが皇帝の位に即いた時、自分の權力に對する狂的熱心から、何でも少しでも有力な位置は皆その弟の手から奪ひ取つて了つた。ミケールは憤怒して、あたりかまはず罵り散した。不平な人の大膽な冷罵を以てあらゆる人をも物をも呪つた。

亞歷山第一世の治世の終年(一八二四)に、うら若いウルテンベルとの皇女で、

後に希臘教に這入てヘレナ、バブロブナと言つた人が結婚したのはこの大公であつた。二十五年と云ふ長い同棲期の間彼女は全く自分の趣味を殺してゐた。で、表面宮庭の儀式、謁見、怠屈な乘車などに忙殺されながら、少しばかりの儀式の閑暇を盗んでは讀書、音樂に耽つたり、藝術家や科學者との交際を樂しんでゐた。彼女は四十五才で未亡人になつた。それから數年間はたゞその一人娘カザリナ、ミケーロブナと、カザリナが二番目に迎へた夫の頑冥な保守主義者メクレンベルヒ、ストレリッツのジョージ公爵と彼女との間に出來た子供の爲めに氣を取られてゐたやうに見えた。然るにニコラス皇帝の崩御とともに彼女の生涯に新しい時代が來た。彼女の宮庭は聖彼得堡のありとあらゆる種類の知識社界の爲めに開かれた。純露主義の主な人々ばかりでなく、自由主義の者も出入した。會話はいつも活氣を帶びて頗る自由であつた。邸宅の女主人はまだ美しかつた。で、彼女はその周圍に端麗な男子の客を集めることを好んだ。彼女の家庭にも美男子ば

かり整へた。その中には後年大藏大臣になつたアバザもゐた。また彼女の世話になつた有名な聲樂家がゐたが、後にアバザの妻となり、今はジュリア、フェオドロブナ、アバザとして彼女の娘の家の女官を務めてゐる。前に述べたいろ〳〵な種類の政治家のほかに、本國や他國の藝術家や科學者も自由に彼女の家に出入した。聖彼得堡を訪問ふ名高い藝術家、科學者が招かれて、ミケーロブ街の立流な宮殿に宿をとるのは、永い間の習慣になつてゐた。彼女の生活が古い宮中の繁瑣な儀式に忙殺されてゐた頃から、彼女は經綸的の活動や仕事を爲る力を失つてゐた。それでも智識に對する趣味と愛とは晩年まで清新であつた。

カザリナ、ミケーロブナの息子が、弱年にも關らず、また露西亞の壓制的な治世の下にゐながら、非常な眞面目と明察を以て社界へ出たのは全く祖母の遺傳である。

恁樣な點は露西亞波蘭とは非常に懸け距れてゐる。波蘭では知識社界の一條で

すらも充分に宮中生活まで達いてゐない。

今日では聖彼得堡に中心的の客間は一つもない。少し前まではアレキセイ、トルストイ伯の夫人が恁樣な中心を造つてゐたが、著名な詩人の未亡人で、露西亞では有數の敎育ある婦人であつたこの人も、今では既う年とつて、社界の注意を牽かなくなつた。今日、この話の起るたびに、進歩した露西亞人仲間では、恁んな風の答をするのが流行になつてゐる。『サロンだと！社交場だと！開化た貴族だと！それを什麼しやうと云ふのだ。そんなものが此都にあつてたまるものか。汝の住んでゐる家がオアシスだ。一歩外はみんな砂漠だ』――それから彼等に對つて、この邦の偉人は誰々だと尋ねる、何處で其人に遇へるかと聞くと答が唇を滑つて出る。『俺はそんな者は知らない、聞いたこともない。この邦には獨逸のやうに偉人は一人もゐない。この點だけは恐らく獨逸より優れてゐる。フエリックス、ダーンもガスターブ、フレータッハもジユリアス、ウヲルフも、誰も一人も

ゐない。國境の彼方で、四卷の小說を書いたり十五卷の歷史を書くやうな、堅實で、學識があり、眞面目な人は此邦にはゐ無い。そんな天才には全く缺乏してゐる』と。

斯樣に自分自身を卑下し嘲笑する特性は、進歩主義の露西亞人仲間には常に起ることで、現代の波蘭人間には珍らしい。で、その中にもおのづから外國人の自負を冷笑してゐる所は、他の邦には一寸見られない事だ。

一般の露西亞人が自國民の生產的で勤勉なことを讃めないやうに、その邦のより進歩したより懷疑的な人達は彼等自身の智力、信任を謳歌しやうとは爲ない。『露西亞人に氣を付けなさい！』とは聖彼得堡で能く耳にする詞である。『彼奴等は知識より想像が勝ち、德義心より知識が勝つてゐる』と。然かしこれは普通の大露西亞人に就ては殆んど事實でない。敏活な理解力、仕事に對する根氣、逆境に處しての忍耐が、彼等の最も貴い德――偉大な柔順――で飾られてゐる。で、彼等が

如何に輕信し易く、それが爲めに一時は驚き慌てることがあつても、中心には平衡の德、賢實な考察力、沈靜な勇氣があつて、どんな危急な場合にも猶落付き排つてゐることが能きるのだ。

之に反して進歩した露西亞人仲間には、ツルゲーネフの小說の中へ幾許も出てくる青年のやうな、輕薄で移氣な性質の者も多い。お望みとあらば束にして御覽に入れる。

ある露西亞の青年がハイデルベルヒの公園で若い英國婦人を見た。彼は何うしても其婦人を手に入れるまでは心が安まらなかつた。女は遂々彼の意に從つた。で、二人は手を携へて露西亞へ遣つて來た。所が、男には些しの財產も無い。その癖働からうとも爲ない。密月が濟むか濟まないうちから、彼は兩人の間には合性がないと言ひだした。それで兩人は別な都會に離れ〳〵に住むことになつた。男は相異らず聖彼得堡で出來るだけ愉快に遊び廻つてゐる。女はシユツセルベルヒに

居て、その娘の兒を、どこ迄も英國風な、自由の氣風に育てながら、その夫を思ひ〳〵日を送つた。男は唯だ快樂を追つて、旅へも出れば氣の向ひたまゝに黑海に小艇も浮べた。夢も見た。彼は既う四十になるが、未だ生涯の仕事が見付らない。長いこと農業に從事したが、今では商買換へをして辯護士にならうと思つてゐる。

恁う言ふのが露西亞人ではないか、と他の國の人は思ふ。然かし、これはスラブ人全體にも共通して居る普通の人情だ。波蘭人もたび〳〵恁んなことをする。恐らく佛蘭西人だつて英國婦人に厭の來る時はある。然かし四十になつてから新生涯に這入るやうなことは爲ない。獨逸人なら先づ離婚を申込んで、自分の職業は其儘續けながら、速ぐにまた新しく結婚する。で、前の話は實際スラブ的だがまだ全く露西亞人獨特だとは言へない。

『貴國の家庭劇を聞きたい』、恁う他國人が知合の露西亞人に尋ねると、次のやう

な話をして呉れる。ある貴族にLと言ふ二人の兄弟があつた。其一人は既に結婚してゐたが、子供が無かつた。ある時其夫人が姙娠した。彼女はその夫に向つてその兄の父親は實は貴夫の弟だと告白する。兄弟の間に決鬪が起つた。血は流したが、然かし生命に別條は無かつた。夫人はある女優と同棲してゐる夫を棄てゝ公然弟と結婚した。而して澤山に子供を作らえた。舅や姑の悦は一通じやない。彼等は双手を擧げて新夫婦を歡迎した。社界でも兩人の行爲を讃めた。――是が果して露西亞的であらうか、否か。

舅や姑の滿足と堪忍深い所は確かに露西亞的だ。

某大學のT教授がその同僚の妻君と惚れ合つた。で、彼はそのM夫人の住んでゐる部屋へ引移つた。入口には兩人の姓名を掲げる、お客を同じ部屋で迎へる、また一緒に招待をも受けた。

是は一層露西亞的だ。他の邦の都では結婚は根本的でなければならない。

L男爵夫人は最初高い官職にゐる或る若い美男子と結婚したが、間もなく夫を棄てゝ、その人の上官で、自分より三十も年上の男の所へ嫁に行つた。で、その結婚後もある若い墺利亞の伯爵と一緒に數年間諸方を漫遊して歸つた。その間彼女の夫は官職でマドリッドに縛られてゐたのだ。聖彼得堡では彼女は若い美術家を自分の邸に住はせて置いた。毎日ある若い詩人にも遇つた。その他にも四五名の男と餘程親密にしてゐた。何しろ年は若し、非常の美人だつたので、交際場裡でも一寸躊躇はしたものゝ、それでも諸方から歡迎された。外務大臣の夜會にも乘込んで、額に金の輪を付けて、ジプシーの女皇のやうな服裝で座つてゐた。上流の社交界で仲々巾が利いた。そして若い紳士に色眼を使つた。それでゐて翌日は、飾もない粗末な毛織物を着て、屋根裏住ひの貧しい白髮の媼さんの所で靴下を編んでゐた。この媼さんは流罪になつた人達の行方を能く知つてゐて、その人達の所へ送る金の工面をしてゐたのだ。夫人はまた有名な或る佛蘭西の雜誌の

爲めに、露西亞の上流社界から種を採つたと云ふ某伯爵夫人の浮沈の多い一生を小說に書いて遺つた。それから莫斯科で出してゐる通俗な文藻の爲めにも、一コペックの小冊子を書いた。彼女は自由主義の急進派の青年達とは至て親密にしてゐた。然かし大都會の警視總監とは猶親しかつた。それが爲めに幾人もの罪人を宥して貰ふことが能きた。

恁樣な奇妙な性癖の採合せこそ露西亞以外には無いことだ。

高等敎育をうけたニコラスYと云ふ青年は六十年代に革命思想に傳染れてゐたが、ある若い娘を連れて外國へ出奔した。その娘は非常に奇麗で、熱情的な女であつた、彼女は當時虛無主義者で、學生騷動にも參加してゐた位で、『文明的に結婚したのだ』――その意味は露西亞では眞實に結婚したのとは異ふ――と稱して、何處までも彼に隨いて行つた。兩人は倫敦へたどり付いた。然るに一八七八年に彼等の歸國した時は、兩人とも全然變つてゐた。男は資本家となり、保守主義者

となり濟して、ブルガリアの巨大な鐵道の布設權を得やうと運動してゐた。女は排他的で、至て堅苦しく、英國熟に浮されて、黑い天鵞絨の着物にいろ〳〵な金剛石の飾を付け、端正で眼立つた服裝をしてゐた。何人が見てもこの二人が、嘗ては自由な反逆的な思想感情を持つた生活を送てゐたものとは思はれない。噂によると、數年後男が死んだ跡で、彼の文古の中から、在世中は思ひも寄らなんだ彼の性格を曝露するやうなものが現はれた。殊にそれが未亡人にとつては甚だ好ましいもので無かつた。爾來と云ふものは彼女の性質は再び一變した。で、極端な自由主義の仲間に這入つて、今では全く進步派の文學や政治の爲めに一身を捧げてゐる。そして恁う公言してゐる。自分は再び自分の青春期を繰返さうと思ふ。なぜなら、妾は六十年代の撥刺たる衝動を今日復た感じたからと。

斯樣な無定見は敎育ある露西亞人の物を受け容れ易い性質から起ることで、他の邦ほどに驚くべきことでない。この邦では習慣として許されてゐる。

それから、この邦の上流社會で離婚が起つたとすると、直ぐ新しい同棲生活に這入らうとするのは主に女の方だ。これが復た露西亞獨特のことである。で、その夫は、屢ば妻の望を恊へるために、甘んじて自分が惡者になつて離緣の宣告を受けることがある。假令、自分はその爲めに再び結婚することが能きないやうな羽目にならうとも。現に昨年も斯んな例があつた。尊敬すべき、立派な敎育をうけた一辯護士は、某公爵の姫君と結婚してゐたが、或時彼は妻から自分は近衛の將校を戀ひ慕つてゐると云ふ告白を聞いた。そこで彼はわざと自分を罪に陷れた。夫の身にとつては實に容易ならざる斯樣な便宜のお蔭で、女の方は何の故障もなく、愛する男と連添ふことが能きた。

聖彼得堡の家庭劇から得たいろ〳〵な根本の特性を斯う云ふ風に見てくると、おのづから一種の代表的な型が浮んで來る。然かし、今一歩進んで、露西亞の上流社會の著名な人物と波蘭のそれとを比較すると、その特性が一層明瞭する。

今の波蘭の代表的貴族とさへ云へば、その日常趣味が農業で、道樂は遊技と芝居、それから舊敎の道の爲め併びに波蘭貴族の繁榮の爲めに盡すことを知識上の趣味としてゐる殿樣を指すのである。彼にとつては敎會は國民性の緊要な絆で、貴族は國民の缺くべからざる先導者と思はれてゐる、で、私費を擲つてその邦の古典を出版したり、ポーゼンの國立劇場やワルソーの波蘭新聞を補助したり、羅馬人やジシユイット敎徒と同盟を造つたりする——若し彼が熱心な保守主義者であり、熱心な波蘭人であるならばだ。さうでなければ、彼は斷えず自分の道樂にばかり氣を取られてゐる。舞蹈の爲めに生活し、競馬へは缺かさず行く。自分の家の汚れた紋所を鍍金する爲めには金滿家の猶太人の銀行家の娘と結婚する。さうして一層の威嚴を添へ、借金を減らして、青年時代のやうな生活を續けて行くのだ。彼は仕事らしい仕事は決して爲ない。勞働を卑み嫌ふ昔からの殿樣氣質がまだ波蘭には殘つてゐる。仕事をする波蘭の貴族とさへ言へば「フェニックス」だと何處

でも言はれてゐる。

露西亞ではそれが全く異ふ。この邦の貴族には肩巾の廣い頑健な百姓の面影が現はれてゐる。

こゝに一つの型が在る。……彼は皇族の出身である。即ちこの邦の古い王室から別れてほゝとに宮家の血統をひいてゐる五十家たらずの貴族の家に生れた裔である。彼は是と云ふほどの財産は相續しなかつた。で、波蘭貴族の特質とも云ふべきラヌド式（譯者曰 Raundo、之を反對に讀むと O du Nar 即ち『おゝ汝の馬鹿』と云ふ意味で、ネルベルグの喜劇の主人公である）の仕事嫌ひの所がなく、初め本國と獨逸で工學を勉強した。邦へ歸つてからは、手づから斧を持て仕事を遣り出した。初めは人に備はれてゐたが、後には自分の資本で橋を架けたり鐵道を布いたりした。生來から仕事が好きでやつた譯ではない。實利主義の露西亞人として金持も大金持に成らうとしたのだ。彼は製造工業を始めた。次には工

場を捨てゝ銀行家になつた。投機者としても古い銀行者すら及ばないほど拔目なく用心深く立廻つた。金儲けにかけては實に鋭い感覺を有つてゐた。それで四十歳の時には天晴の金滿家になつた。彼はあくまでも實例主義で、無趣味で、數學的の頭をもつた打算家で、情熱の何物たるかも知らねば、毛ほどの美術趣味もなかつた。彼が若し以太利へ旅行するとすれば、自然を樂しむ爲めでもなければ、美術品を觀る爲めでもない。モナコで投機をやつて日を消すに違ひない。

彼はかやうに實利主義ではあつたが、狹量でもなければ、墮落もして居なかつた。ガリシヤで小露西亞の百姓どもを苛めた波蘭の地主達のやうなことはない。彼等は（近年になつて禁じられるまでは）希臘教會の扉を閉めて百姓の參拜を禁じ、その鍵を猶太人に與けて置いた。これは小作人達が祭禮の折救世主を拜みたい一心からその鍵を買戻させるやうに仕向けたのだ。自分は何も信仰を有たない癖に、他人には皆それを有たせたがると云ふものだ。また今日のガリシヤの

波蘭貴族は人間の製造で生きてゐるのだが、百姓にも成るべく其製造を強ひると云ふ有樣だ。彼にはそんな所はない。彼はいかにも無情な人間で、頑固でもあれば冷酷でもあつた。然かし彼は他人を害するやうなことは爲なかつた。彼も若い時には人道家であつた。それは感情から出たのではなく、論理上の正義たる權利から歸納しての話だ。然かし今日では既うそれも昔のやうではない。と言ふのは、彼は最早全體としての社會の大不幸に對して一人の力が何の効果もないことを悟つたからである。また彼には寸毫の功もない所へ强て努力すると云ふやうな熱情が缺けてゐたからである。慧眼の人でありながら、彼は先天的に總ての哲學を嫌つた。彼は數理哲學とも云ふやうな書物を書いて、數學の部門にまでも實物教授の必要を說き、線とか點とか云ふ詞で不實在の抽象を現はす非を鳴らした。

數學的頭腦を有つた人に能くあるやうに、彼は音樂が上手で、あらゆる音樂上の技術も呑込み、近世樂に通曉してゐて、始中終好い音樂の奏演を聞くのを樂んでゐた。

その人は百姓のやうに粗大で、野卑ではあるが、然かし輕薄な所がない。堅苦しいが、淺薄でない。冷淡で金は欲しがるが、正直で、時としては寛大である。恁樣にして彼は其知識の何の點からも割出した自信の强い物質主義者である。個人の靈魂の不滅など云ふ事は、彼にとつては空想の慰み物に過ぎないほどのはかない眞實で、よしそれが一婦人の口から出たにしても、彼にはたやすく聞捨出來ないのである。他にいくらも女優があるのに、なぜあんな舞妓を圍つて置くのかと聞くと、『彼女は他のものより少しはあつさりしてゐる』と恁う答へる。實際それだけが彼の動機らしい。その女が彼に對して何う思つてゐやうと、彼はそんな事を信じやうとも爲なければ、信ずることも能きない。

然かし斯樣な大膽な、公開した物質主義にも關らず、この男が十二分な物質主義者になれるにはまだ遠かつた。若し彼が全く空想的の素質を缺いてゐたなら彼は

代表的の露西亞人とは言へない。チエルヌイシエブスキーの『何が爲さるべきか』と云ふ書物が彼の聖書であつた。その本の革命的理論と內容とは古い社會の傳習に對抗して彼に眞理を示した。口にこそ出さなかつたが、彼の靜かな思想のなかで、彼は兩性間の關係の改善を要求してゐた。形式の宗敎や道德を遙かに後方へ棄てて來た新時代の人に適當な自由の發展することを望んでゐた。で、彼のかやうな精神生活のなかには、社會的理想鄕が日蔭と夕暗のなかに萠ざし、花咲く一隅もあつたのである。

次の型は一層露西亞獨特だ。……彼も矢張公爵だが、韃靼の出らしい。名前が何よりの證據だ。然かし、骨相は全く歐羅巴的であつた。美男子で、優雅で、五十才の今日も猶青年のやうに輝く眼付をしてゐる。飛拔けた才智を有つた男で、文學、語學、辯舌の諸道に長けてゐた。

矢張貧乏なので、極く若い頃から實業に就いた。所が、最初に不幸に逢つた。

何處かの外國にゐた頃半ば公けの席上でやつた政治演說がその筋の忌憚に觸れて邦へ歸る早々、エスゾニヤの小さな田舍町へ流された。其處で彼は自分と全く敎育の程度の違つた人達ばかりの仲で、凡らゆる活動、進步、生活から斷たれて、十年か十二年を過ごした。終には配所から許されて歸る希望まで失つて了つて、絕望半分にその土地の娘を嫁つた。女は美人で氣質も善かつたが、夫との間は修養の深い淵で距てられてゐた。彼女自身も公爵夫人として聖彼得堡の交際場裡に立たうなどとは少しも思つてゐなかつた。家庭と子供の爲めにばかり暮してゐた。

彼は以前よりもなほ美しくなり華奢になつて歸つて來た。政治熱は既うすつかり消えてゐた。彼は政府の一官吏に任命されて、漸く自由を與へられた。丁度輕蔑されたやうな形で、以前自分がその爲めに苦勞した思想と正反對な仕事に就いた。氷のやうに冷かに、思想も生活法も實利主義になり滌してゐたが、彼に唯つ

た一つのパッションがあつた。それは物を集める道樂で。よく書籍や寫本や銅器や妾を集めた。彼は文學美術の上では『藝術の爲めの藝術』主義に凝り固り、處世上ではルイ十五世の宮廷時代の主義を奉じてゐる。佛蘭西の作家で彼の特に好きなのはフローベル、ゾラ、ユイマンズで、露西亞では叙情詩人アンドレーエフスキーがお氣に入りである。この詩人は決して情緒を種にした題材を取扱はず、涙脆いものなどは書かなかつたが、唯ツルゲネーフの小説を皆んな韻文に書き直さうといふ奇體な藝術的の考を有つてゐた。

彼にも情慾はあるが、感情に走るやうな點は少しも無い。正直で、充分信用の出來る男である——尤も彼の年齢だけは當にならない——。他人に丁寧で、自分を頼る女には充分打解ける。で、彼はその女を自分流に仕込んでから信頼すると云ふ風である。何でも、感情は不幸の源だからその根を杜絶せと云ふやうに仕込む。それからその女への話は大抵他の情婦の噂だが、それでも幾人かの女が魔入

られたやうに彼の後を追つてゐる。

時々その男は自分の部屋へ閉籠つて、好きな佛蘭西作家の小像の前で默つてみとれてゐることがある。嘗て何んな巴里女もこの長い濃い口髭を生した作家ほどには惚れられなかつた。彼は一冊の特殊な版本とか一枚の肉筆とかを買ふ爲めにわざ〳〵巴里まで出掛けることがある。

彼は文學と美術のほかには些しの信頼をも持たない。で、至て冷酷な思想を抱いてゐる彼も、この方面では情慾に近いほどの露西亞流の熱情を以て引附けられてゐる。

スラブ人種に共通な特性は容易に彼のうちに見出すことが能きる。もしも猶ほ綿密に比較研究をしてみるならば、適切に露西亞獨特の點が分るであらう。丁度波蘭にK、Jと云ふ同じやうな性格の有名な貴族がある。閑雅で、冷靜で、細心で、それでゐて一方では情熱な所がある。この波蘭人も露西亞人も、二人を知つてゐ

る者には、同様に立派に見えるが、然かしどつちかと言へば波蘭人の方は虚榮心が強く、露西亞人の方はむきつけに五欲が克つてゐる。波蘭人には昔の武士的因習が殘つてゐるのに、露西亞人は夙くにそれを振捨ててゐる。露西亞人の方が抱擁の度も深く、從て一層大きな力が出る。波蘭人は凡らゆる方面で名を知られたいと云ふヂレッタントな欲望から弱點を見せるが、露西亞人は其處へ行くと堅い金屬である。波蘭人は美を以て理想とし、露西亞人は力を以て理想として居る。

前に並べて出した二人の代表的露西亞人を較べて見ると、其間にどんなに異つた所があるにしても、一つの共通點のあることは爭へない。それは斯うである。彼等が青年時代の希望も努力も、周圍の事情の爲に何の役にも立たなかつた。そこで彼等は、必要に迫まられて、自分が生來創られたよりは猶と小さな人間に成り下つて了つた。押堅められて、實利的の物質主義者にたつた。如何なる時でも自分を差置いて他人の爲めに盡すと云ふやうなことが無くなつた。それでゐて、人

が自分の罪のない癖を庇護うやうに、彼等の理想を大事に支へてゐた。

露西亞の知識生活には、すぐ人の眼に附くやうな二つの潮流がある。一つは一般の歐洲文明を咀嚼し發達させやうとする傾向、今一つは西歐の『異端』に反感を持つ退嬰的な國粹保存主義であつて、この二方面は歷史上で著明な彼得大帝とニコラス皇帝によつて、最も能く代表されてゐる。二人は實に生粹な露西亞型である。

若しもずつと以前まで歷史を溯るならば、古代マスコバイトの皇帝イワン三世と、暴王イワン四世が好い例である。殊に四世は特別に重く見るべきだ。彼は佛蘭西の路易十一世と英國のヘンリー八世を一丸めにしたやうな性格だと言はれてゐる。前者のやうに不思議な殺伐な暴君、思慮深い帝王で、それで後者のやうに幾人もの后妃を構つてゐた。人は彼得大帝が過劇な改革を遣り出した時に、初めて古代マスコバイト諸王の古い傳習が破れたやうに思ひ、十九世紀に這入つてニ

コラス皇帝になつてから、再びその亂暴、固陋、權威、殘忍、皇帝の威力に對する不思議な信念が復活したやうに考へてゐるが、以前イワン三世の時、もう既に外國の皇室に賴んで醫者や職人や藝術家を呼んでゐた。彼は國外の石工、鑄金家、鍛工などを招き、建築家や工業家をボログナ、ベニスあたりから伴れて來た。イワン四世の時も矢張歐洲の各方面から手藝家を招んだ。皇帝は僧侶達の反對のあつたにも關らず英國に親しみ、印刷術を其邦に創めた。要するに、昔にあつては、西歐文明の模倣者とマスコバイト皇帝及び長髯のビザンチン露西亞の特色ある組織の下に育つた獨創との間の對照が左程判然と目立た無かつた。然るにそれが彼得大帝の時になつて、一擊のもとに長老制度を打壞し、希臘教會から寺領を奪ひ、傳來の裝飾（寧ろその髯）を禁じ、ビザンチン流の長い服裝に代ゆるに平凡な制服を用ゐ、露西亞特有の事情に通じない外國人の一團を帝國内の總ての主要な官省の主腦に据えてから、西歐に對恃する傾向が著しくなつてきた。それからニコ

ラスの代になつて、皇帝自身が自由主義の西歐から感染された理想や改革に對する非常な嫌惡心を懷いて、各大學の學生の數を三百名に限り、歐洲憲法の講義を禁じ、哲學の講座を正教の僧侶に托せ、歴史類の講義の原稿は官憲の校閲を經させると云ふやうな制限を設け、次で一八四〇年には外國の書籍や新聞を國境内に入れることを禁じたので、露西亞を西歐から引離す傾向が猶更著しくなつた。その傾向が何處まで極端に行つたかと云ふことに就て、恁んな話がある。當時の學校の先生が幾何學の講義で三角形の性質を敎える時には必ず『三位一體說』の事を附言するやうに命令られてゐた。劇場ではレッシングの『エミリア、ガロッチ』もゲーテの『エグモント』もシルラーの『フイエスコ』も皆んな興行を禁じられてゐたが、唯だロシニの『ウイルヘルム、テル』だけは標題を『勇悍なチャールス』と改めて許されてゐた。

古代の異質な露西亞人の典型が、前述べたやうに、劃然とイワン三世とイワ

ン四世、及び彼得大帝とニコラス皇帝に現はれてゐるものとすれば、近代露西亞人の典型は、勇氣と女性的の感受性を調合した亞歴一世の性格に歴然と現はれてゐる――彼は一方には、全ての壓制に惱む者に對する同情を含んだ思慮深い自由主義と、人民の救主であると云ふ讃辭に對する欲望を抱いてゐた。また他方には、忍耐力と、『神聖同盟』のやうな夢想郷を喜ぶマダム、ド、クリユードネルの神秘主義をもつてゐた。(譯者曰、クリユードネルは其時代に於ける露西亞宗教界の女傑であつた。亞歴一世の知遇を受け、帝に神聖同盟の計畫を敎えたのも彼女である と言はれてゐる。フォード著『マダム、クリユードネルの生涯及書簡』參照)

斯樣な性癖は現代露西亞の上流の青年間によく見る所だ。彼等はユーゲネ、デューリングやエドワード、ホン、ハルトマンに會見し、私淑する爲めに伯林へ出掛ける。そして、自ら積極主義者とか厭世主義者とか稱して、近代文明の頂點に立つてゐるやうな氣がしてゐる。――所が、一たん歸國するが早いか、速ぐに露西亞

流の上流保主々義者に化けて了ふ。そして、專制主義の傳道に熱心になり、スラブ民族の鄕土の全能と希臘正敎會の榮光を謳歌する。斯樣な青年の一人のZ公爵と云ふのは好人物で――但し好い詩人ではなかつたが――哲學者で、尠くも一年に一度はハルトマンの足下に蹲づくを例としてゐた男であるが、それがカトコフの死後、彼の遺した莫斯科の新聞に據て、彼の遺業を繼續しやうと企てたものだ。然かし彼は見事に失敗した。人氣のなかつた譯ではない、彼の勢力が足らなんだのだ。

それはさうとして、他國にも類似の場合もあるが、露西亞獨特の顯象として、その邦の知識社界が西歐派と純露派に別れてゐることを言はねばならぬ。殊に注意すべきは、純露派初期の國粹派が、また西歐心酔派と同じく、國外の哲學詩歌の研究から起つたことで、是が第一に露西亞的の所だ。一方には、この邦の偉大なる革命的精神が三十年代の始めに莫斯科大學に起つた運動の結果であるとは言ふ

までもない。その頃、佛蘭西や獨逸で學んで歸つた或る教授連が若い學生間に佛蘭西の社會主義や獨逸哲學の趣味を吹込んだ。全く秘密の間に、禁制の書物の中から、幾多の青年の團體は、或る者はサンシモンやフーリエルの思想を、或る者はシエリングやヘーゲルの人世觀を鑑賞した。彼等は自然々々に二派に分れた。その一派はヘルツエンやバクーニンの屬したもので、その派の主張は始めルイ、ブランが稱導し、軟文學の方では、ジョージサンドなどが手傳つた佛蘭西社會主義の理想へ、ヘーゲルの高弟等（ルーゲ、ホイエルバッハ）の思想を融和せしめたものであつた。それから他の一派は、シエリングの自然哲學と、鄕土的、古代的の獨逸を讃美する獨逸浪漫派とに傳染れた純露派であつて、この派の者は、斯樣な精神から、極端に生粹なスラブ的文明と態度とを國是の大本として要求した。彼等は彼得大帝の時代に羨望の眼を向けた。マスコバイト露西亞は彼等の理想と憧憬の故鄕であつた。イワン暴帝の恐ろしい法律も闕はばこそ、彼等にとつては

特色のない近代の自由主義や立憲主義よりもより懷しかつた。彼等の一番貴い研究はスラブ民族の考古學で、ビザンチンの神學に深く分け入るだけ露西亞の國民精神が明にされるやうに思つてゐた。

斯樣な點から見れば、彼等の行動は彼得大帝以後存在した一種の勢力と努力に具體的の聲を與へたものと云ふことが能きる。大帝の當時國内に在つた反對の分子と云つてはラスコルニック派の者より他には無かつた。是は取も直さず古い正教の一派で、改革者ニコンの時代から國立の教會を離れ、その後幾つもの宗派に分離したものだ。長老ニコンは教會の儀式を一定する考へで、その信徒に三つの指で十字を切り、三度續けて讃美語を稱へることを命じた。で、之に反抗した者は悲慘な眼に逢つた。然るにラスコルニックの一派は、二つの指で十字を切り、たゞ二つだけ續けて讃美語を稱へると云ふ彼等の信條を確く守つて、その爲めには笞の責をも流刑をも甘んじて受けた。彼等はその信條の爲めには生きながら燒か

れることをも辭せなんだ。なぜなら、もし三の數に同意するなら未來永劫の定罪を忍ばなければならないと信じてゐたから。で、彼等が漸く別の宗派として自分の禮拜堂や祈禱を持つことの能きるやうになつたのは一二年過ぎてからであつた――然かしその後でも猶危險物として取扱はれ、迫害されてゐた。今日この派で最も注目すべきはボロネッ州を根據としてゐた『デュコボルトシイ』（Dukhobortsi 靈の戰士の意）と稱する一派で、宗徒の多くは水の無いコーカサスの一地方に配流せられた。然るに彼等の精魂はその地方をコーカサスでも最も豐饒な富有な土地に變へて了つた。彼等は老若男女の別なく共同で働いてゐる。學校はないが、それでも皆んな讀書が能きる。自分で自分の子供を教育するからだ。彼等は聖像を認めない。で、其家の像の置かるべき隅には縫箔した手拭が懸つてゐる。彼等は十字架をも身に附けない。却てそれを基督の苦痛の標章や記念品として嫌つてゐる。

戰爭時代には彼等は國家の爲めに一番大きな務をした。軍需品や負傷兵を荷つてコーカサスの險道を搬んだ。それから常平生あれだけ殘酷に自分達を取扱つた國家のために、喜んで任務に服し、荷車も時間も無價で供給した。然かし、この時彼等の發揮した猶つと著しい特徴は、彼等が西歐の異端な新教組織を深く嫌つてゐると云ふことであつた。

が、恁樣な國民的自覺と外國に對する憎惡心が、下層人民の間から昂つて社會の上流までも動かしたのは、一八一二年に奈翁が佛蘭西、獨逸、以太利、西班牙の軍勢を以て露西亞を氾した國民的大戰爭の時からであつた。國民文學に對する旺盛な嗜好がこの大戰爭の大捷に伴つて興つた。それで、プシユキンでもグリボイエドフでも、どんなに一方がモリエルに感化され一方がバイロンに感化されたにしても、其邦に於ける外國の影響に對して反抗的に起つたものと見るべきである。で、後年の純露派は、既に植ゑ付けられ、成熟してゐた運動を繼續したに過ぎ

ないと言はゞ言へる。茲に注意すべきはその名稱が似てゐるために、純露主義と大露西亞主義とを間違へてはならぬことである。大露西亞主義者は、國民主義から、君主制と共和制とを問はず、スラブ民族の大合同と大スラブ帝國の建設を希望する點に於て、バクーニンのやうに歐洲的急進主義者である。然るに純露派は之に反して、西方波蘭人に同情する者に對しても最も大膽な攻擊を向けた。彼等は、より狹い國民的感情を代表するもので、古いビザンチンの文明と宗教とに憧れてゐる。

斯樣に觀てくると、要するに進歩した露西亞の愛國者の前に横る矛盾は次のやうである。彼はその能力の最善を盡して外國の感化を振棄てやうとする。然かし彼はその感化の齎す結果が國民的獨創力とその發達とに有害であることを信ずると同時に、露西亞人が土其古を除いては他の歐羅巴諸國の何の國民よりも未開の有樣にあると云ふことを認めねばならない。頂度、グリボイエドフの『智ある者

の不幸』の中に現る有名な代表的露西亞人のチャトスキーのやうに、彼は莫斯科が風俗習慣から言語、表情、流行、痴態の末まで巴里を模倣るからとて、何んなに憤慨した所で、一つ向き直るが最後、矢張チャトスキーと同じやうに、意氣地なく模倣ばかりを能にして、智ある人に喰つて掛る野蠻民のやうな露西亞人を面と見なければならない。他國人の優れた智能に對する全らゆる攻擊は、所詮は之に服從し之から得を獲る露西亞自身の攻擊になつて了ふ。チャトスキーは最後の獨白で、『矢つ張之が自分の父國か』と苦しい叫びを洩してゐるが、實に幾千人かの露西亞人がこの失望の叫びで一生を終つてゐるのだ。

言ひ易ゆれば、露西亞人の國民性を擴張し發達させて、他國からの分子を成るべく斥けやうとするその邦の先覺者も、終には恁う云ふ信念に歸着する。即ち自國に這入つてゐる西歐文明の破片でも、明かに疎雜野蠻な國民性よりも貴いものだと云ふことである。彼と雖も政府と人民とを離して考へることは能きない。矢

張大國民はそれに相當した政府を戴いてゐる。彼自身設し何んなに高尚な教育なり科學的思索力なり藝術的趣味なりを有つてゐたとした所で、それは西歐文明の賜で、自分の邦の殘虐な政府や野蠻な施政を塗り立てる爲めにのみ、恁樣な賜を使用するのは露西亞人自身の過ちであると云ふ事を認めねばならない。彼がより純潔により熱心にその邦の爲めに正義、人道、自由の恩惠を望めば望むほど、不斷不撓の志を以て斯の世紀に流行する國民的傾向に反對せねばならぬことが明になる。思想の進歩と自由を望むと同時に露西亞に於ける國粹保存の感情を强めることの能きないのは彼の知る所であらう。要するに進歩の途上に於て露西亞は今恁樣な點に到達した。即ち彼は必然に、次の二つの途のうち、その何れかを擇ばなければならない——進歩的自由と文明の理想を棄てゝ國粹主義を採るか、或は鄕土の上の確い立脚地を去て、稀薄な國民精神を加味した斷乎たる自由主義を採るかである。

あらゆる露西亞の顯著な人達はこの矛盾と戰はねばならぬ。プシユキンやゴーゴルやドストイエフスキーは決然と前の方向を擇び、アレキサンダー、ヘルツエンやイワン、ツルゲーネフは後の方向を擇んだ。

七

一八八七年、露西亞の獨逸帝國に對する敵意はその極點に達した。國民は遠からずして戰爭が起るものと思つてゐた。外國人は斯の歐洲戰爭が一髮の危機に迫つてゐることを屢々聞かされた。勿論その噂は悲觀的のものであつた。他の邦よりも却て露西亞の國內で、自國の大缺點を明瞭と自認してゐた。それよりも猶と著しいことは露西亞人の殆んど全部が自國の敗北を望んでゐたことである。敢て北方露西亞ばかりでなく、南方露西亞でもこの聲を聞いた。西から來た者も東から來た者も、自由を愛する有能な露西亞人は渾な一樣にそれを望んでゐた。私だけでも確かに五十人からの露西亞人が、言ひ合せたやうに、將に來るべき戰爭が必然敗北に終るだらうと話してゐたのを聞いた。しかも彼等は色々と違つた社

會のもので、お互に識合でも何でもなかつた。實に現代の露西亞の情態に對する國民の深い失望を窺ふには、これ程意味のある現象はない。で、今日の慘めな不幸の位置から彼等を救ふには、自國の敗戰に依て其統治上の缺點を放け出して貰ふよりほかには仕方が無いのだ。

露西亞で彼樣な思想が踏り出し、その邦の愛國者、識者の間に一見最も非愛國的な希望が育てられるやうになつたのは、今に始まつた事ではない。既にクリミヤ戰爭の當時も矢張その通りで、その時の敗戰に伴つた健全な功果は、明に記臆に存してゐる。

現代の露西亞を支配する恐るべき壓政は一部の人の考へてゐるほど舊いものではない。之は亞歷二世の治下の最初の十年間の短いながらに力强く且著しかつた自由と解放の時代に對する反動である。要するに露西亞では、自由は舊く、壓政は比較的に新しい。最古の露西亞の法律書（Pravda Russkaya）には體刑を認め

てゐない。奴隷は十六世紀になつて初めて出來た。で、最後の自由の都プスコフは、昔のノブゴロッドのやうに、幾世紀間市民議會に依て統治された共和國であつたが、マスコバイト皇帝ワシリの殘虐な命令により其特種を剝がれ、住民は『皇帝の御惠に依つて幸福に生活できるやうに』露西亞內地に送還せられ、新しい移民が、之に代つた。中世紀頃は聲高く力强くその意見を發表した有力な地方議會(Zemstvo)も、十八世紀になつてから漸く其勢力を失つた。今日露西亞の爲政者が據つて立つ所の絕體專政の理は十九世紀に到つてから始めて形をとつたのである。其起源は家族制度にさへ關係がない。

亞歷一世はその治世の初期には殆んど近代的精神を表明してゐた。當時の皇帝は衷心から自由を好む人のやうに思はれた。彼はその時代を愛し、保守的革命家を憎み、永い間奈翁の崇拜者であつた。佛蘭西に好意を表し、そして波蘭の位置を高めることを考へてゐた。彼の治世のうちには、皇帝の權力も歐羅巴の他の邦

々のやうに仁化せられ、人民の聲が聞かれるやうになるだらうとも思はれた。それで、その後佛蘭西革命及び新帝國に對し保守的大反動が起つた時でも、當時歐州を風靡した保守主義をこの邦に擴げたのは露西亞人ではなかつた。却てピエドモンテス、ド、マイストル及ひ佛人ボーナルドの二人の外國人であつた。で、この主義は露西亞の道學者の雷同をえて益々勢力を植ゑ、遂には今日のやうに皇帝の玉座の礎となつたのである。

されば露西亞今日の狀態は、幾千年間に涉つた沈滯の結果でもなければ、歩みの餘り遲いために後れて來た文明の結果でもなく、また永い間續いて敎化を阻止した結果でもない。それは實に三四十年前の保守的反動の結果だ。それが一揆や暗殺のあるたびに斷えず新らしく守備を堅めて來たのだ。

それと言ふも、皇帝自身が善意を缺き熱心を缺かれた譯ではない。皇帝の人格に關してはあらゆる方面で善く言つてゐる。近侍の者にも好んで淸廉な士ばかり

を集められた。彼の露土戰爭の當時、高級士官にまで及んだ腐敗、欺瞞の氣が行軍の進歩をまでさまたげたことを、ひどく憤慨せられたこともある。要するに皇帝は眞面目な人であつた。然かしその時代の露西亞はずつと偉大な人、偉大な統御者を皇帝の倚子に要したのである。或は、偉大な統御者を要するやうな國民は不幸かも知れない。なぜなら和蘭や瑞西のやうな邦にはその必要がない。然かし、偉大な爲政者を要しながら、その人を得ないほど不幸なことはない。

個人としての皇帝の德はよくわかつてゐる。幾世紀間と言はず、恐らく昔から露西亞の皇帝のうちで、女との關係に就て口善惡ない者の噂にすら上らなかつたのはこの方だけである。男女の別なく、昔から帝位に即いた人は皆な色情上の放縱な生活で名高かかつた。その間に立て陛下は慥かに夫として父としての好典型であつた。然るに、この模範的帝王の家庭を中心としながら、その宮庭内は華美な輕薄とあらゆる放恣な生活に荒んでゐた。世人の知る如くアレキシス大公は美

人の ド、ビユーハルナイス伯爵夫人と公然同棲してゐた。その夫はロイヒテンベルヒ公爵で、大公の從弟に當る人であるが、長い物には卷かれろ主義で、對手の皇族に自分の權利を讓つて喋つてゐた。それからウラジミル大公の正偶で美人であつた獨逸王妃マリアと言へば、その當時の宮庭での姪樂の權化であつた。この人に就ては『聖彼得堡の社交界』(Un Societe, de St. Petersbourg) の著者が、獨逸國に對する反感から、隨分と思切つた想像を逞くして惡聲を放つてゐる。彼樣な憎惡から來た記事は信ずる必要がないとしても、王妃が宮庭の嬉樂の爲めには世事一切を放擲しても構はないと云ふやうな傾向を奬めたことだけは事實である。彼女は有らゆる遊技をする會合を造つた。その中でも『隱れん坊』(Cache-Cache)が一番流行つた。遊技中に高貴な婦人が近衛士官と一緒に空湯槽の中で見附かつたなどと云ふことが折々あつた。それから是等の貴族社界の青年間に行はれた遊技の一つは隊を組んで橇の遠乘をすることだ。さう云ふ時には何時も美し

い婦人連を士官の引く籠橇の中に隱して乘せる。時を見計つて士官連が橇を顚覆させて中味を雪の上に晒け出すと言ふのである。そこで大笑が起る。

宮庭の或部分にはまた意氣の違つた一團があつて、そこでは專念に舞蹈ばかりに凝つてゐる。彼等はその道にかけては眞實の狂人で、折さへあれば何時も踊つてゐる。數ケ月間斷え間なしに踊り狂ふことさへある。この連中の踊つてゐない時はいかにも手持無沙汰だ。全體、露西亞のかやうな社界の茶ばなしほど怠屈なものはない。お客の馬車が來る。貴賓が現はれる。嘿つて席につく。誰も左樣な高貴な婦人に話しかけうる者がない。すると、貴女の方から居並んだ一人の婦人に「お身體はだうです」と言ふやうな問が掛る。型の如く對手が簡單に返事をすると、そこでまた會話が斷えて了ふ。若しも對手の婦人が如才ないか、または至て善人で高貴な人の前でも羞恥まないやうな性質の者ならば、再び對手に口を開かせるやうな返事をする。然かしその話題に就て二三の簡單な問答が濟んで了ふ

と――是は信ずべき人の目擊した話だが――二十分から二十五分位は苦痛の沈嘿が續く。で、その間他の客は微笑を以て高貴の客人を眺めてゐると、對手はまたその周圍に微笑を振り振くと云ふ工合だ。

彼樣な場合と違つた喧擾の場所でも、より尠なからざる悲痛の印象を與へることがある。目擊者が次のやうな光景を物語つた。老侍臣のA伯爵がワルツを踊りながら倒れて、床の上に箕居をかくと、皇帝がそれを見て笑つた。此の老人の一生はその人の御機嫌を窺ふことばかりで苦勞して來たのだ。然るに今自分の失策が圖らずもその人の上機嫌を買つたので、彼は得意になつて再び立上つて踊り出した。そして此度は滑稽な身振をして轉んだ。それが再び皇帝を笑はした。で、老伯爵は夜一晩道化役者を務めて至尊の口から笑を洩らさせた。その間彼の娘で、皇后の侍女をしてゐる現在の伯爵夫人は、滿足した態度で、眼に笑を浮べてはゐたが、內心には父の野卑な行動に對する怒を呑みながら、また一方には彼のお覺

目出度いのを見て喜びもしながら、きちんと固くなつて座つてゐた。頂度この光景は女帝アンナ、イワノブナの宮庭を寫した名畫に依て不窮にされた光景を想ひ出させる。その畫は銅版になつて廣く露西亞に流布してゐるもので、宮庭の舞蹈室で女帝のお慰みに露西亞の元始の家族の一團が肩飛びを遣つてゐる所を描いたものである。

亞歴二世頃の宮庭生活は今日のやうに無氣力のものではなかつた。またその頃は今日のやうに無智な御幣荷ぎもなかつた。現今の貴族社界にはラドスットク、パシユコフ教を信じてゐるものが隨分あるが、是は數年前にある山師が創めた宗旨である。で、この社界の者の大半は、家内に病人が出來るとクロンスタッドのジョン僧正の所へ送ることにしてある。なぜなら、僧正の御手が觸れると不思儀に病氣が治るものと信ぜられてゐるのだ。ロリス、メリコフですら自分の病人の娘を彼の所へ送つたくらいだ。

上流社界で盛んに希臘正教の復興熱が起つたのは比較的新しいことで、今がその全盛時代だ。即ち亞歴二世の時代に始つた。それは皇帝が熱心であつた爲めではない。それ所ではない。實は獨逸の宮家から嫁いだ皇后が、初めは人望をうる爲めに遣り出したのが、終には浮氣な夫に愛憎づかしをされたのに感附いて、この世に頼るものが欲しくなつた所から、次第に熱心に希臘正教に歸依するやうになつたのだ。で、露西亞帝國が始まつて以來、位置も低く勢力もなかつた僧侶が初めて頭を昂げ出して、悧口で狂氣じみた皇室附の僧正バシャノフが宮庭で勢威を得るやうになつた。今の皇后に希臘教を説ひて宗旨變へをさせたのもこの人だ。それから、宮廷内の貴女のうちには熱心に正教の傳播に力を入れて、殊に露西亞國境内の羅馬加特利教及ルーテル新教と戰つた者もあつたが、そのうちでも伯爵家のアントニー、ドミトリエブナ、ブルドワと言ふ少し不具の、元氣強い、聰明な娘が一番著るしかつた。宮庭の純露主義者とアクザコフとカトコフとの間

を結び付けたのも彼女であつた。獨逸に敵意を挾んで露西亞と波蘭との間の親善を圖る侯爵ウキーロポルスキーの計畫に第一に賛同したのも彼女であつた。その父は名高い有力な大臣であつたので、彼女は父の力を藉りてウキーロポルスキーを波蘭總督に推選した。然かし一八六三年の騒動後は、彼女の主義は更に一轉して、羅馬舊教を根絶する必要を感じた。で、その結果がリスアニアと白人露西亞に於ける恐ろしい宗教上の迫害となつて現はれた。幾多の騒動の企が波蘭人の血を流して靜まつた時にヴイルナの處刑者ムラビエフを謳歌する首唱者に立つたのも彼女であつた。で、この英雄に送る記念物の寄附金を公宴の席上で自由主義のスボロフ大公に迫つて、大公から『もし貴女が金の斧を作つて送るなら、寄附金をしやう』と云ふ大膽な返事をえ、その爲め大公の名望を全然墜させたのも彼女であつた。彼女は丁度皇帝が何か讀物でも爲やうと云ふ機嫌の時を見計つては、カトコフの書いた最も激烈な血腥い論文を陛下の机の上に置いた。一八六六年に、

カラコゾフが逆殺の隱謀を企てた跡で、非常な保守的反動が起つた折にも、あらゆる教育機關を頑逆派の手中に移す運動をした隨一人は彼女であつた。恁うして其の時代から今日までこの宗教的反動が續いて來た。半ばは勢から半ばは注意深い用心から。で、政治的反動がそれ〻自分の渦流の中に引込んで、益々その勢を進めた。

この政治的反動は一八六三年から始まつたものと見てよい。その前までは理想の饗宴が續いた。全國民は進歩の希望をもつて騒いだ。農奴解放の計畫に醉はされた。

クリミヤ戰爭の結果はニコラス皇帝の政策を一變させた。馬鹿げた狹量と殘酷な暴政で帝國内のあらゆる事物を統べやうと云ふ時代は過ぎ去つたのだ。それ迄は歐洲から來る書籍も新聞も一切禁じられ、國境を通る旅行者は出入ともに詳しく査べられた。そればかりか帝國第一の人が既に時代の風潮を恐ろしく忌み嫌つ